HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『ウラジーミル諸公物語』覚書 : Сказание о Князьях Владимирских
Author(s)	栗生沢, 猛夫
Citation	スラヴ研究, 24, 21-50
Issue Date	1979-07
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/5088
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00002586870.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『ウラジーミル諸公物語』覚書

Сказание о Князьях Владимирских

栗生沢　猛　夫

ロシア史上モスクワが独立の政治単位として登場するのは比較的遅く13世紀末のことであるが，その後のモスクワ国家の発展はめざましく，15世紀後半のイヴァン三世期には北東ロシアのほとんどすべての政治勢力がモスクワの軍門に下っていた。もちろんモスクワのこの発展には幾多の紆余曲折があり，われわれはそれをあたかも歴史的必然であるかのごとく考えることはできない。だがいずれにせよ，15世紀末には，モスクワは他の諸勢力を圧してロシアの覇者としての地位を不動にし，同時にロシアを国際政治の舞台に導くにいたっていた。

ところでこの時期のモスクワに，政治・社会・宗教上の諸問題を直接の対象とする著述が多数著わされたことが知られている。これは文学史家らによって「社会時評文学」публицистика とよびならわされている。この文学的傾向は15世紀末からとくに強まり，論争的書簡や，自己の主義・主張の宣伝を目的とする〈слово〉や〈сказание〉とよばれる独立の諸作品が多数出現した[1]。なかでも，モスクワの内外における政治的地位の上昇と直接関わりをもつ作品が多かったことはことわるまでもない。Я. С. ルリエの言をかりれば，「15世紀末～16世紀初頭は，ロシア国家の増大しつつある意義と偉大さとを，種々の方式で反映する一連の政治理論の形成期」[2]であった。本稿はこのような時期の政治的文学作品の一つである，『ウラジーミル諸公物語』[3]（以下『物語』と略記する）をとりあげ，成長過程にあった若きモスクワ国家の公式的政治理念について考察することを目的としている。

1

モスクワ国家の公式的政治理念とは，通例以下のようなものと考えられている。帝政期における古代ルーシ政治思想史研究の第一人者 М. ディヤーコノフに従って要約してみよう[4]。

1) たとえば И. У. ブドーヴニッツは16世紀にこのような傾向の著述家が少なくとも35人はいたと述べている。И. У. Будовниц, Русская Публицистика XVI века, М.-Л. 1947, стр. 3; 主にソヴエトの研究者が好んで用いる публицистика という概念のもつ問題性については，W. Philipp, Die gedankliche Begründung der Moskauer Autokratie bei ihrer Entstehung (1458–1522), in; Forschungen zur osteuropäischen Geschichte, Bd. 15, 1970 SS. 63–65. を参照のこと。

2) Я. С. Лурье, Идеологическая борьба в русской публицистике конца XV-начала XVI века, М.-Л. 1960, стр. 347.

3) テクストは Р. П. Дмитриева, Сказание о Князьях Владимирских, М.-Л. 1955, стр. 171–178.

4) М. Дьяконов, Власть Московских Государей, Очерки из истории политических идей древней Руси до конца XVI века СПб., 1889. 要約は主に第一章（ビザンツの古ルーシにたいする教会的・政治的関係），第二章（古ルーシ文学における政治的テーマ），第三章（フローレンス合同とビザンツ帝国滅亡の政治的帰結）に関わるものである。以下引用ページはとくに記さない。引用文内の括弧は引用者の補ったもの，傍点は原文強調である。

ロシアはかつてビザンツ帝国からキリスト教をうけいれたが，政治的思考法も全面的にビザンツから学んだ。すなわちロシアは君主権の「神授性」богоизбранность 理念と，そこから帰結される諸結論——①君主権は「力づくで」獲得することはできない，②悪しき君主も神に由来する，③君主は神の前に（のみ）責任を負っている，④君主は正教信仰を擁護する義務を負う，などのビザンツ的諸理念——をビザンツよりうけいれた。

これらすでにキエフ時代から知られていた諸理念は，モスクワ時代になってもなお基本的政治理念であり続けた。だがモスクワ時代においては，新たな展開もみられることになる。すなわち，15 世紀中葉のビザンツに起きた二つの事件——1439 年のフローレンス会議におけるローマ教会・ギリシア正教会合同決議，および 1453 年のビザンツ帝国の滅亡——の結果，モスクワ国家はビザンツ的政治理念のロシア化をめざすこととなった。ビザンツの宗教的・政治的没落を示すこれら二つの出来事から，ロシア人は，モスクワ・ルーシこそが唯一の正教帝国となったという確信をひき出したのである。ロシアがビザンツの後継者（「ビザンツの遺産」の継承者）であるというこの確信は，イヴァン三世とビザンツ最後の皇帝の姪ゾエとの婚姻（1472）により強められ，イヴァンはこの「誇り高いビザンツの皇女」の「要求」により 250 年にわたって続いた「タタールの軛」からの離脱を決行する（1480 年）。これによりロシアは文字通りの独立国家となることができた。続いて，1492 年（世界開闢紀元 7000 年）に予定されていた世界終末の予言が成就されずに終ったとき，時の府主教ゾシマは，爾後存続すべき世界においては，今やモスクワこそがその中心，すなわち「新しきコンスタンチンの都」であるべきだという主張を明らかにした。ここにはじめて「ビザンツ帝国の首都のそれまでの（世界的）意味のモスクワへの移行という思想」が表出されたのである。いわゆる「帝国の移行」 translatio imperii 理念のロシア版である。この思想を完成させたのは，プスコフの僧フィロフェイであった。彼はヴァシーリー三世らにあてた書簡で，「モスクワ第三ローマ」理念を唱えた。この理念は同じ時期に「モスクワ諸君主の（臣下にたいする）至高の権力」に関する理論を展開させていたヨシフ・ヴォロツキーらの活動と相俟って普及し，「総主教座の創設（1589 年）にいたるまでの時期，そしてその後においても，支配的な国家的意味を獲得」することとなる。

フィロフェイにより集大成された「ロシア帝国の政治理論」は，さらに 16 世紀を通じて，聖俗の一連の文人らによって正当化され，補強された。たとえば 16 世紀におけるロシア教会の権威づけの試みはその一環である。この時期に使徒アンドレイのロシア布教伝説が再評価をうける。またかつてコンスタンチヌス大帝がローマ教皇シリヴェストルに与えたという教権の標章（白主教頭巾）がビザンツを経てノヴゴロドに伝えられたことを物語る『ノヴゴロドの白い主教頭巾の物語』も著わされた。由緒あるイコンなどの聖物が正教世界各地からロシアに集められたり，多くのロシア人僧侶の列聖の試みがなされたのも，ロシア教会の権威，ひいてはロシア国家の権威を高めようとする志向の表われに他ならなかった。他方，政治理念そのものを補強しようという試みも活発に行なわれた。なかでも，皇帝権の標章のロシアへの移入に関する伝説と，ロシア君主がローマ皇帝アウグストゥスにまでさかのぼる由緒ある家系に属すことを主張する伝説が重要である。この二伝

説のうち前者は後者より早く，『モノマフ帝冠物語』や『バビロン帝国物語』のなかで主張され，その後出現する後者ともども広く普及したが，やがて両者はスピリドン・サヴァにより書簡の形式で一つにまとめられ，16世紀中葉の «Степенная книга»（『階梯書』）等に採用され，イヴァン四世の利用するところとなった。以上の如くして「ロシア正教帝国の政治理論」は根拠を与えられた。「この理論はその構成の浅薄な虚構性にもかかわらず，同時代人の精神に強い影響を与え，当時の政治的民族意識の基盤となった。」

15・16世紀ロシアの政治思想について語られるとき，以上のごときディヤーコノフ的理解が一般的であったと言ってよい。そこでは，①ロシアの政治思想の根本はビザンツからの借用であり，②ビザンツ帝国滅亡後も，ビザンツ的理念が「ロシア化」されたにすぎず，その結果，モスクワ国家は「ビザンツの遺産」の継承者であると考えられている[5]。しかしながら，このような理解は，近年，とくにソヴェトの研究者から強い批判をうけている。なかでも，上述の理解においては，①ビザンツからの借用（ないし影響）という側面が過大評価され，ルーシ独自の政治意識の意味が無視されていること，②外的状況の変化のもつ影響力が過大評価され，モスクワ・ロシアの内在的発展と強化こそがモスクワ政治思想の結晶化を促した点が見落されていること，が指摘されている。より具体的に言えば，ソヴェト史学は，「ビザンツの遺産」のロシアによる継承という「伝説」，つまりモスクワ国家の公式的理念がビザンツに由来するという考え方を否定して，次のように主張する。すなわち，イヴァン三世もその後継者も，ビザンツ皇帝の座を要求したことはなかったこと，ゾエ（ロシアではソフィアとよばれた）・パレオローグとの婚姻がイヴァン三世によってビザンツの遺産への根拠と考えられたことも実際にはなかったこと，モスクワ国家の政治理念の展開はなによりもこの国家の実力向上——生産力の上昇と労働の社会的分業の進展——，国内諸地方間の経済的結合の強化，封建的分立と内紛にたいする住民の不満と統一への要求等に帰因することなどである[6]。

以上の如く，ソヴェトの研究者の間では，「ビザンツの遺産」の継承を主張するかの如き諸理念がモスクワ国家の公式的政治理念であったことはない，と考えられているが，それではモスクワ国家の公式的政治理念とはいかなるものであったであろうか。ここで注目

5) モスクワあるいはロシアをビザンツ精神の継承者とする傾向はあまりにも一般的であるのでここで例をあげる必要はなかろう。ただ本稿と直接関連する例を一つだけあげれば，W. K. Medlin, Moscow and East Rome, Geneva, 1952 がその典型である。それにたいして「ビザンツの遺産」問題をより慎重な立場から論じたものに，D. Obolensky, Russia's Byzantine Heritage, in: Oxford Slavonic Papers, I, 1950. pp. 87-123. がある。最近のものとしてはロシア思想史における西欧的要素の抽出に努める D. W. Treadgold, The West in Russia and China, vol. 1 (Russia, 1472-1917), Cambridge, 1973. をビザンツ的ロシア理解への批判としてみることができる。問題領域全体についてはとりあえず E. Hösch, Byzanz und die Byzanzidee in der russischen Geschichte, in: Saeculum 20, (1969), S. 6-17. が簡潔にしてよき手引となろう。

6) このような見解をもっとも包括的に提起したのはルリエの前掲書であるが，早くはすでに Д. С. Лихачев, К вопросу о теории русского государства в конце XV и XVI в., в: Исторический Журнал, 1944, № 7-8, стр. 32 сл.; Его же, Национальное самосознание Древней Руси, М.-Л. 1945, стр. 95 сл.; Его же, Культура Руси, эпохи образования русского национального государства (конец XIV-начало XVI в.), стр. 35-43. においてみることができる。

されるのが，既述のディヤーコノフも伝える，二つの伝説である。この，帝権の標章のモスクワへの伝来とモスクワ諸君主がアウグストゥスの後裔であることを説く伝説（以下に「モノマフ帝冠伝説」と「アウグストゥス後裔伝説」と略記する）は，後述するように，本稿で検討しようとしている『物語』によって伝えられ，『物語』の中核をなしているものであるが，通説ではこれらは「モスクワ・第三ローマ」理念を補強するものとされていた。すなわち二伝説の伝える理念と「第三ローマ」理念との間には質的差異はなく，両者一体となって当時のモスクワ国家の公式的理念を構成したとされていた[7]。それにたいし，ソヴェトの研究者は「第三ローマ」理念がもっぱら聖職者の側から提起された非現実的な理念であることを指摘する。すなわち彼らによれば，モスクワ国家当局は，「第三ローマ」理念の提起する「ビザンツの遺産」の継承問題には関わらず，より現実的な問題，つまり北東ルーシの統一と，とくに旧キエフ国家領の回復（「キエフの遺産」）の問題に取り組んだ。このような目的をもつモスクワ国家にとって，「第三ローマ」理念は，第一に，コンスタンチノープルをめぐるトルコとの戦争にモスクワを導く恐れのあること，第二に，教会側の教権主義的な思想を押しつけるものであること，のゆえにふさわしからざるものと考えられた。他方，上記伝説は世俗的な方法でモスクワ国家の権威を高めるものであり，政治理念としてすぐれていた。それゆえモスクワ国家の公式的政治理念となりえたのは後者である。ソヴェトの研究者はこのように主張したが，それをさらに要約して言えば，次のようになろう。すなわち，モスクワ・ルーシにおける政治理念には二つの流れがあり，一つは，「世界正教界の中心のロシアへの移行」（「コンスタンチノープル（ないしビザンツ）の遺産」）を説くもの，他は，「キエフの遺産」への継承権を説くものである。前者は「第三ローマ」理念においてもっともよく定式化され，後者は，ロシア諸君主の支配権の根拠づけを目的とする上記二伝説のなかで主張された。モスクワ国家が採用したのは後者であった[8]。

2

さて，ソヴェトの研究者によって，モスクワ国家の公式的政治理念とみなされた伝説で

7) このような見解をもっているソヴェトの研究者もいないわけではない。たとえば，M. H. Тихомиров, Источниковедение истории СССР, вып. 1. М. 1962, стр. 276–9; Н. К. Гудзий, История древней русской литературы, изд. 6-ое М. 1956, стр. 252–254.

8) А. Л. Гольдберг, У истоков московских историко-политических идей XVв. в; Труды Отдела Древнерусской Литературы（以下 ТОДРЛ と省略）, т. XXIV (1969), стр. 150; A. Gol'dberg, Historische Wirklichkeit und Fälschung der Idee "Moskau-das Dritte Rom", in: Jahrbuch für Geschichte der Sozialistischen Länder Europas, Bd. 15/2 (1971), SS. 124–125, 127, 134–135. なお J. A. V. Haney, Moscow——Second Constantinople, Third Rome or Second Kiev? (The Tale of the Princes of Vladimir), in: Canadian Slavic Studies, III, no. 2 (1968), pp. 354–367. は表題に示されるごとく，モスクワ政治理念に三つの種類のあることを論じている。本稿に示した二つに加えて，モスクワを「第二のコンスタンチノープル」とするものである。だが，これは実質的には「モスクワ第三ローマ」理念と同質である。「第三ローマ」理念について詳しくは，拙稿「モスクワ第三ローマ理念考」（金子幸彦編『ロシアの思想と文学』1977年恒文社）および上記，A. ゴリドベルク論文を参照されたい。ゴリドベルク論文はソヴェト研究者の「第三ローマ」理念にたいする態度をもっとも明瞭に示してくれる最近の論稿である。また，この理念が表明されているフィロフェイの書簡の翻訳は，拙稿「『モスクワ第三ローマ』以前」，『えうる』第7号（1979年）白馬書房に含まれている。

あるが，それらは，前節でも述べたように，『物語』の中核を構成するものであった。だがこれらの伝説は，実は『物語』によってのみ伝えられているわけではない。同様の内容を『物語』にきわめて近い形で伝えるものに，ディヤーコノフも指摘している『スピリドン・サヴァの書簡』（以下『書簡』と略記する）がある。この両作品は内容的に，また文体的に，きわめて近く，相互に密接な関係のあることをうかがわせるが，この両者の関係をめぐる問題については，両作品の執筆年代，作者の問題とともに次節に委ねるとして，本節ではまず『物語』の内容をみることにしたい。

『物語』は，旧約聖書『創世記』に素材を得たノアによる三人の子への世界分割の話をもって始まる。この部分は『創世記』の記事と必ずしも一致せず，混乱もみられるが（詳しくは後記訳註参照），作者の注意はとくにノアの第三子アフェト（ヤペテ）の一族にむけられている。すなわちこの一族のなかからエジプト初代の王セオストル，全世界の支配者フィリクス，そしてかのマケドニアのアレクサンドロスが出たことが記されている。アレクサンドロスは死に臨んで，エジプトの地を家臣のプトレマイオスに与えたが，このプトレマイオス家の支配は22代におよび，ついには女王クレオパトラの時代に，ローマのアウグストゥスにより滅ぼされてしまう。「全世界の皇帝」となったアウグストゥスは，世界に貢税を課し，各地に親族縁者を支配者として任ずる。なかでもヴィスワ河畔地方にはプルスを任じたが，のちに彼の名にちなんで「プルスの地」とよばれるようになったというこの地方から，ノヴゴロドの住民は自らを治める支配者を招致することになった。ノヴゴロドの使者の要請をうけてやってきたのは，リューリックを長兄とする三人兄弟である。このうちリューリックがロシア諸公の祖となる。すなわちロシアにキリスト教を導入したウラジーミル聖公は，リューリックより四代目，そしてウラジーミル・モノマフはそれよりさらに四代後のキエフ大公であるという。

かくしてロシア諸公は古代世界帝国の支配者の家系に結びつけられたのであるが，このモチーフは，さらに帝権の標章のロシアへの移行伝説によって補強される。すなわち，上述のウラジーミル・モノマフは「ツァーリグラード」（帝都）コンスタンチノープルに遠征したとされるが，そのときビザンツ皇帝コンスタンチノス・モノマコスはロシア軍に和を求め，自己の帝冠をその他の貴重品——そのなかの一つは元来皇帝アウグストゥスのものであった——ともどもウラジーミルに贈ったという。『物語』によれば，ウラジーミル・フセヴォロドヴィチがモノマフとよばれるようになったのはこの時以来のことである。ここでコンスタンチノスが贈ったという帝冠は，ロシア史上有名な「モノマフの冠」であるが，これについては後述しよう。いずれにせよ，ここではロシアの支配者は，その血筋において，また支配権の正当性を示す帝権の標章によって，古代と中世の世界帝国（ローマとビザンツ）に結びつけられているわけである。

『物語』はついで，正しい信仰から離れたローマ教会を非難する短い部分をもって一応終っているようにみえるが，実は『物語』の多くの写本においてはその後にすぐ続いて，いわゆる『リトワ諸公の系譜』[9] という独立の作品がでてくる。これはゲディミナス（ゲジミン）から15世紀中葉のヴィタウタス（ヴィトフト）にいたるまでのリトワ諸大公の

9)《Родословие литовских князей》，テクストは Дмитриева, Сказание, стр. 179-181.

系譜を，モスクワの政治的立場から叙述したものであるが，Р. П. ドミトリエヴァをはじめとする諸研究者は，これをも『物語』の本質的構成部分とみなしている[10]。テーマの上で『物語』の上述部分と異なるとはいえ，作品の意図するところにおいては，双方は一体をなしているからである。それゆえ『物語』の検討を行なう場合，われわれはこの『系譜』をも含む全体を念頭におく必要がある。(補註参照)

『物語』は全体として以上のような構成と内容とをもっているが，以下とくに上記二伝説について考察してみたい。(なお二伝説の個々の諸点については訳註において扱う予定である)。

まずロシア諸公がアウグストゥスの後裔であるとする伝説(「アウグストゥス後裔伝説」)について。この荒唐無稽な伝説において注目されることは，これまでの諸年代記では，ロシア諸公の系譜が「ヴァリャーグ人」リューリックに始まるとされていたのにたいして(「リューリック招致伝説」)[11]，ここでは同じリューリックの名が用いられながら，「ヴァリャーグ」については言及されておらず，ロシア諸公の系譜はさらにさかのぼって，古代の世界帝国に結びつけられていることである。ロシア諸公をアウグストゥスと結びつける志向は，ロシアでは『物語』や既述の『書簡』が執筆される16世紀初頭（後述）以前には，少なくとも記述文学 письменность としては知られていなかった。この点に『物語』や『書簡』の価値の一端があることは疑いない[12]。だがこの志向がこの時期に唐突に出現したとは考えるべきでない。中世，ないしとくに初期ルネサンス期のヨーロッパ諸国においては多くの有力な家系が，その由来を，「救世主自身がその治世に生まれんと望まれた」アウグストゥスに求めていたことが知られているが，同様のことは中世のビザンツ，セルビア，ブルガリア，さらにはリトワでも見られるという[13]。『物語』や『書簡』の作者らがこれらの先例を知っていたかどうかは不明であるが，彼らより以前のロシアにこの中世的志向が知られていたことを暗示する若干の事実がある。たとえば，すでに1489年にイヴァン三世の使者ユーリー・トラハニオト(トラハニオテス)が神聖ローマ皇帝にたいし，イヴァンの祖先は「ローマを教皇に委ね，自らはビザンツで統治したローマ初代の皇帝たち」と「愛と友誼」の関係に立っていたことを伝えている[14]。この発言は一般的なものであって，とくに「アウグストゥス後裔伝説」を表明してはいないが，モスクワが早くから自らをローマと結びつけようとしていたことを物語るものとして興味深い[15]。なお，ユーリーはかのソフィア・パレオローグに伴なってモスクワ入りしたギリシア人であるが，そ

10) Там же, стр. 35-36, 86-88.

11)『原初年代記』862年（6370年）の項を参照（天野他訳『古代ロシア研究』第2巻，1962年，8頁以下)。

12) Лурье, Указ. соч. стр. 482. これにたいし И. Н. ジュダーノフや A. A. ジミーンは，この志向が15世紀末にはすでに知られていたとするが，それについては次節を参照。

13) Лихачев, Указ. соч. стр. 102-104; А. Л. Гольдберг, К истории рассказа о потомках Августа и о дарах Мономаха, ТОДРЛ, XXX, 1976, стр. 206. などを参照。

14) Памятники дипломатических сношении древней России с державами иностранными, т. I. СПб. 1851, столб. 17.

15) ユーリー・トラハニオートが，ロシア諸公とローマ初代皇帝らとの「愛と友誼」の関係についての観念をどこから得たのかは不明である。メドリンは，これを西欧中世史上の有名な偽作文書『コンスタンチヌスの寄進状』(Donatio Constantini) のセルビア語訳のロシアへの紹介（15世紀）と結びつけている。Medlin, op. cit. p. 83-84.

れにもかかわらずモスクワ君主の権威づけを試みた上の言明において，ソフィアの名をもち出していないことは注目されるところである。だが，これについては指摘するに留めておこう。他の例は，1517年と1526/27年の二度神聖ローマ皇帝などの使者としてモスクワを訪れたジギスムント・フォン・ヘルベルシュタインの伝えるところである。彼はその『モスクワ事情』の冒頭のロシア諸公の由来を述べた部分において，リューリックら三人兄弟について記したあと次のように記している。「ロシア人は，これら三人兄弟がローマ人に由来すると伝えられていること，また（現在の）モスクワ大公がその家系を彼らから導き出していることに，今日もなお誇りを感じている。」[16]ヘルベルシュタインがこのローマ人の後裔としてのリューリックという考えをどこから，またいつ聞き知ったか——第一回滞在中か第二回目か，あるいは帰国後執筆（1549年）までの時期か——は問題となるところであるが，おそらくヘルベルシュタイン滞在当時のモスクワにはこの伝説がすでに広く流布していたと推察される[17]。

次に『物語』のもう一つのモチーフである帝権の標章のロシアへの移行伝説（「モノマフ帝冠伝説」）について。まず問題になるのは，この伝説はいつごろから知られるようになったかである。結論から言えば，この伝説も，先の「アウグストゥス後裔伝説」同様，16世紀初頭，『物語』や『書簡』とともにはじめて出現したと考えられる。今日，「モノマフの帝冠」に言及している文献のなかで，最も古いものが『物語』と『書簡』であるからである。従来この点については見解が分れており，『バビロン帝国物語』や『ノヴゴロドの白い主教頭巾の物語』などを，この伝説にふれているより早期の文献とする研究者もいたが[18]，これは今日ではほぼ斥けられている[19]。

「モノマフ帝冠伝説」は既述のヘルベルシュタインの『モスクワ事情』においても二か所でふれられている。彼は次のように記している。「そこで最後にセヴァルド（フセヴォロド）の子ウラジーミルが全ロシアの専制君主となった。彼の別名はモノマコスである。この支配者はいくつかの宝物や装身具を遺したが，これらはロシア人が今日もなお，その新しい公をその座に任ぜんとする際に利用している。」[20] さらに，「この冠——彼らはそれ

16) ヘルベルシュタインは最初，その著作を，ラテン語で執筆し（《Rerum Moscoviticarum Commentarii》）1549年にウィーンで出版した。これはその後何度も版を重ねたのみならず，ドイツ語（著者自身の手になるものも含め多数），イタリア語（2種類），英語（2），チェコ語，ロシア語（3），スロヴェニア語などに翻訳されている。本稿では，バーゼルの歴史家 Heinrich Pantaleon のドイツ語訳（1567年版，初版は1563年）を基にした現代ドイツ語版を利用する。Sigismund zu Herberstein, Reise zu den Moskowitern 1526, Herausgegeben und eingeleitet von T. Seifert, München 1966.（引用は S. 58, 括弧内は他の版を参照にして引用者が補った）

17) この伝説については，さらに H. Schaeder, Moskau das Dritte Rom. Bad Homburg v. der Höhe, 1963, SS. 82-117; E. Ivanka, Rurik und die Brüder des Augustus, in: Orientalia christiania periodica, XVIII (1958; 3), SS. 393-396 を参照。

18) たとえば，次節に述べるように И. Н. ジュダーノフは『バビロン帝国物語』を『物語』に先行させている（И. Н. Жданов, Русский былевой эпос. СПб., 1895. стр. 62-63, 150-151）。また H. H. ローゾフは『ノヴゴロドの白い主教頭巾の物語』を15世紀末の作品と考えている（H. H. Розов, Повесть о новгородском белом клобуке как памятник общерусской публицистики XV века, ТОДРЛ, IX. 1953, стр. 203-205）.

19) М. О. Скрипиль, Сказание о Вавилоне-граде, ТОДРЛ. IX, 1953, стр. 128-129; Лурье, Указ. соч., стр., 229-234, 349-350, 354-355, 386-387; Истоки русской беллетристики. Возникновение жанров сюжетного повествования в древнерусской литературе, под ред. Я. С. Лурье, Л. 1970, стр. 399.

20) Herberstein, Reise, S. 66.（括弧内は引用者）

を彼らの言葉で Schapka とよぶが――はかってウラジーミル・モノマコスがかぶったものである。それは相互に見事に編まれた細い棒状の金からできており，宝石がちりばめられている。」[21]ヘルベルシュタインが正確にはいつこの伝説を知るにいたったかは不明であるが，それがすでに述べたように彼のモスクワ滞在中のことであるとするならば[22]，この伝説は16世紀初頭には確実に知られていたことになる。と同時に，それ以前に伝説が知られていたことを示す文献がないとすれば，この伝説はまさに16世紀初頭に出現した可能性がでてくる。

ところで，ヘルベルシュタインが「モノマフのかぶった冠」云々と述べたのは，1498年2月4日に挙行されたドミトリー・イヴァノヴィチ（イヴァン三世の孫）の戴冠式に関する箇所においてである。つまり彼は「モノマフの冠」が1498年には用いられていたとしているわけである。1498年の戴冠式で「モノマフの冠」が本当に利用されたかどうかについても研究者の見解は分れている[23]。問題は諸年代記の記述をどう理解するか，またとくに，このときにロシア史上はじめて編まれたという «чин венчания»（『戴冠式規定』）[24]――ヘルベルシュタインはこれを知っているわけである――において，「モノマフの冠」に言及されている写本とそうでない写本のいずれを，より基本的なものととるか，にあるのであるが，筆者はこれを解くべき資料をもたない。いずれにせよ，かりに一部の研究者らが考えるように，「モノマフの冠」が1498年にはじめて使用されたとしても，それをもって「伝説」の出現とみなすわけにはいくまい。この点で興味深いのはルリエの見解である。彼は「モノマフの冠」が史上はじめて登場したのは，ほかならぬ上の戴冠式のときであることを主張する研究者の一人であるが，この「モノマフの冠」は，それを「理論的に」根拠づける何らかの作品を必要としたと考え，それを『物語』と『書簡』に求めている。かくてルリエも「モノマフ帝冠伝説」そのものは16世紀初頭にはじめて文学的結晶をみたと考えているのである[25]。

以上に「伝説」について述べてきたが，次に「モノマフの冠」そのものについて述べておこう。周知のように「モノマフの冠」なるものが，モスクワのクレムリ内にある旧武器庫 оружейная палата に収められている。これは歴代モスクワ大公とツァーリがそれによって戴冠されたことになっている冠で，1721年にピョートル大帝がツァーリの称号にかわって，インペラートルの称号を採用するに及んで，その歴史的使命を終えている。この「モノマフの冠」は「伝説」といかなる関係にあるのであろうか。それはまたいつ頃から伝えられたものであろうか。次に検討すべき点である。

「モノマフの冠」がいつ頃から伝えられたかについては長いこと諸説紛々としていた[26]。

---

21) Ibid. 91.
22) Schaeder, op. cit. S. 90–91. をも参照。
23) たとえば В. Малинин, Старец Елеазарова монастыря Филофей и его послания, Киев 1901, стр. 518. や J. L. I. Fennell Ivan the Great of Moscow, London, 1963, p. 337. は年代記の記述をもとに1498年に「モノマフの冠」がはじめて用いられたことを主張する。他方，Schaeder, op. cit. S. 85, 91. や Дмитриева, Сказание, стр. 116–117. は，それを否定する。
24) 註51を参照。
25) Лурье, Указ. соч. стр. 384–386.
26) これについてはさしあたってディヤーコノフ前掲書，75–76，マリーニンの前掲書，500–507，比較的最近のものでは M. Hellmann, Moskau und Byzanz, in: Jahrbücher für Geschichte Osteuropas（以下 JbfGO）17 (1969), S. 328. をみよ。

「伝説」を信じて，コンスタンチノス・モノマコスが実際にウラジーミル・モノマフに贈ったと考えるもの，もっとさかのぼって皇女アンナがビザンツからウラジーミル聖公に嫁したときにもたらしたとするもの，さらに12世紀ケルソン（クリミア半島）でつくられたとするものなど様々であるが，なかには，14世紀にカイロであるアラビア人職人によって造られたものが，エジプトのスルタン（エル・メリク・エン・パシル・イブン・カラウン）によって1317年に親族の一人であるキプチャク汗ウズベクに贈られ，さらに後者からイヴァン一世（カリタ）に下賜されたと，まことしやかに説くものもいる[27]。この説ほど大胆ではないにしろ，「モノマフの冠」を13世紀末～14世紀初頭の中央アジアで作られたとする説は，今日多くの研究者が主張するところである[28]。またこれとの関連で，ウズベク汗がイヴァン一世に贈ったという点も，次に述べる事情もあって多くの史家の支持をうけている。それはイヴァン一世の遺言状（1339年頃）に「黄金の冠」шапка золотая というのが出てくることである[29]。イヴァンはこの冠について詳しく記さず，それがどこからきたのかは不明であるが，中央アジアの13～14世紀の作品であるという現存の「モノマフの冠」にこれを結びつけたくなるのも理解されよう。なお興味深いのは，上の「黄金の冠」はイヴァン一世の遺言状だけでなく，さらに，イヴァン二世，ドミトリー・ドンスコイ，ヴァシーリー一世，ヴァシーリー二世のそれぞれの遺言状でも言及され[30]，その後イヴァン三世とヴァシーリー三世のそれにはみえないが，イヴァン四世の遺言状（1572年）にいたって，再び，だが今度は「黄金の冠」としてではなく，「モノマフの冠」шапка мономаховская として現われてくることである[31]。イヴァン三世とヴァシーリー三世の遺言状においてまったく言及されていないことの理由は不明であるが，「黄金の冠」を遺贈した最後の大公であるヴァシーリー二世と，「モノマフの冠」を遺贈した最初のツァーリであるイヴァン四世までの百年間に，「モノマフ帝冠伝説」が出現していたことを考慮にいれれば，イヴァン四世のいう「モノマフの冠」とは，ほかならぬ，ヴァシーリー二世までの「黄金の冠」であると考えたくなってくるであろう。もっとも，諸研究者も認める如く現存の「モノマフの冠」に関する特殊研究はいまだ存せず，この点についてこれ以上穿さくすることは有益でない[32]。

---

27) これは Ю. Д. Филимонов, О времени происхождения знаменитой шапки мономаха, в: Чтения императорского русского исторического общества（以下 ЧОИДР), кн. 2 (1898), стр. 61-62. の見解である。これについては Hellmann, op. cit. 328. を参照。

28) たとえば Б. А. Рыбаков, Ремесло древней Руси, М. 1948, стр. 642-643; M. Cherniavsky, Khan or Basileus: An aspect of Russian Mediaeval political theory, in: The Journal of the History of Ideas, vol. XX, No. 4 (1959), p. 471.

29) Духовные и договорные грамоты великих и удельных князей XIV-XVI вв. подготовил к печати Л. В. Черепнин, ответственный редактор С. В. Бахрушин. М.-Л. 1950,（以下 ДДГ), стр. 8, 10.

30)「黄金の冠」にふれているそれぞれの遺言状（すべて上記 ДДГ に収録）の年代は，ДДГ によると，イヴァン二世—1358年，ドミトリー・ドンスコイ—1375年（第一の遺言状），1389年（第二），ヴァシーリー二世—1406年（第一），1417年（第二），1423年（第三），ヴァシーリー二世—1461/62年である。ヴァシーリー二世以前のモスクワ大公ではシメオン・ゴルドゥイの遺言状（1353年）のみが「黄金の冠」に言及していない。

31) ДДГ, стр. 433.

32) モスクワ諸大公・ツァーリの遺言状における「黄金の冠」および「モノマフの冠」については，さらに，R. C. Howes, The Testaments of the Grand Princes of Moscow, Cornell Univ. Press, Ithaca, 1967, pp. 97-103. を参照のこと。なお本書には「モノマフの冠」の写真も付されている。

さて以上に述べたごとく上記二伝説は，『物語』と『書簡』においてはじめて定式化されたのであったが，二伝説および『物語』と『書簡』に関して全体として言いうることは，これらが当時にあってはめずらしく世俗的な性格をもっていることである。たとえば『物語』はなるほどノアによる世界分割という聖書的素材をもって始められ，またローマ教会の離教を厳しく非難するなど宗教色を失っていないが——僧侶スピリドン・サヴァの手になる『書簡』については言うまでもない——，『物語』の主要テーマはきわめて世俗的である。すなわち，世界帝国の形成，帝国権力とその標章の移行という主題はそれだけで非宗教的であるばかりでなく，それらはひたすら地上の諸君主の意志によって進行させられており，ことさら神の摂理によって根拠づけられてはいない。主題の上でも，その扱い方の上でも，「モスクワ第三ローマ」理念と著しい対照をなしているといえよう。既述の如く，ソヴェトの研究者は『物語』のこのような性格に注目し，これをモスクワ国家の公式的イデオロギーを表明するものと考えたのであったが，妥当な結論といえる。ただ一つ限定を加えておくべきと思われるのは，ソヴェトの研究者のもつ脱ビザンツ主義的とでもよぶべき傾向にたいしてである。彼らは『物語』に謳われる理念，すなわちモスクワ国家の公式的政治理念が，「モスクワ第三ローマ」理念などの説く「ビザンツの遺産」とはまったく関係のないことを強調するあまり，それがもつビザンツ的要素そのものを否定するにいたっている。だがコンスタンチノス・モノマコスがウラジーミル・モノマフに帝権の標章を与えた，とモスクワ国家当局が考えたとするならば，モスクワが一般的な意味での「ビザンツ的支配者」理念に大きな関心を示していたことは否定できない[33]。

3

前節では『物語』の内容を検討したが，既述の如く，同様の内容はスピリドン・サヴァの『書簡』によっても伝えられている。というよりは，上記二伝説を中心とする話は，まず最初はもっぱら，ほぼ同時期の，内容的にも文体的にも極めて近い，そして相互に密接なつながりのある上記二作品によって伝えられているというべきであろう。そこで当然，二作品のうちいずれが先で，いずれがあとかという問題——両作品の関係の問題——がでてくる。本節で検討すべき課題である。

この課題にとりかかる前に，『書簡』について若干ふれておこう。『書簡』[34]の目的とするところは，ヴァシーリー三世とモスクワ大公権の賛美であるが[35]，著者スピリドン・サヴァ——トヴェーリ出身の，一度はコンスタンチノープル総主教によって「キエフ府主教」に任じられながら，リトワ大公にしてポーランド王カジミェシにより捕えられ，のちモスクワへ逃れてきたが，そのままフェラポントフ修道院に幽閉されてしまったところの老僧[36]——がこのような書簡を執筆するにいたったのは，『書簡』自体が伝えるように，

33) この点で示唆に富むのは，И. Дуйчев, Византия и византийская литература в посланиях Ивана Грозного, ТОДРЛ. XV. 1958, стр. 159–176. である。

34) 《Послание Спиридона-Саввы》. テクストは Дмитриева, Сказание, стр. 159–170. に収録されている。

35) Там же, стр. 80.

36) スピリドン・サヴァの生涯と執筆活動の詳細については，とりあえず，Дмитриева, Сказание,

ある人物の依頼によってであった。この人物は大公に近い聖職者であったと考えられる。この人物はスピリドンに直接依頼したわけではなかったが，スピリドンは自らの名誉回復のためででもあろうか（彼はトルコ支配下にある「堕落せるギリシア人」総主教によって「キエフ府主教」に任じられていた），この任を買って出たのであった。このとき彼はすでに91歳になっていたと自ら記している。『書簡』の内容は，すでに紹介した『物語』とほとんど同一であるが，『物語』が一応ロシア諸公の血筋と彼らのもつ帝権の標章の由来に関する部分（すなわち上記二伝説）に限定され，『リトワ諸公の系譜』とは区別されて伝わっている（前述）のにたいし，『書簡』の方は，『物語』と『リトワ諸公の系譜』の両者を合せもつ内容となっている[37]。そこで『書簡』は『物語』と『リトワ諸公の系譜』の二つの独立の作品をもとに編まれたのか，あるいは逆に，『書簡』をもとに後二者が編まれたのかが古くから問題とされてきたわけである。

これまでこの問題にとくに取り組んだ研究者は多くはない。そのなかでИ. Н. ジュダーノフは帝政期ロシアの研究者のなかにあってこの問題を専門に扱った唯一の人物であるが，彼は，『物語』を，帝政の標章のバビロンからビザンツ経由でのロシアへの到来を伝える『バビロン帝国物語』の続編とみなし，亡命セルビア人パホーミー・ロゴフェートによって，15世紀末に著わされたものと考えた。『物語』はその後16世紀になってから（ヴァシーリー三世期，ただし1523年以前），スピリドン・サヴァによって書き改められたが，これがその『書簡』であるという[38]。

ジュダーノフの見解はその後特殊研究が現われなかったこともあって，多くの研究者の依拠するところとなったが[39]，すでに今世紀20年代にH. シェーダーが[40]，そして後にはР. П. ドミトリエヴァが[41]これにたいして疑義を表明した。とくにドミトリエヴァは，これまでの研究者のなかでもっとも多くの写本——たとえば『物語』については32写本，ジュダーノフは5写本，『書簡』については3写本，ジュダーノフは1写本のみ——にあ

стр. 73–90. を参照。本稿ではこの点に立ちいることはできないが，スピリドン・サヴァについては，とくに①いかなる著作を彼のものとしうるか，②彼の思想的立場はいかなるものか，について史家の見解が分れている。①については，たとえばВ. О. クリュチェフスキーは，スピリドン・サヴァが1503年頃に死去したと考えており，それゆえ彼を，ヴァシーリー三世期に執筆された『書簡』の著者とはみていない。また②についてはИ. У. ブドーヴニッツやドミトリエヴァはスピリドン・サヴァを〈нестяжатель〉の一人とみなすのにたいし，ルリエはスピリドンを〈нестяжатель〉でもヨシフ派でもないとするなどである。см. В. О. Ключевский, Древнерусские жития святых как исторический источник, М. 1871=Slavistic Printings and Reprintings, Mouton 1968 стр. 200; Будовниц, указ. соч. стр. 101; Лурье, указ. соч. 224–225, 482–484; А. А. Зимин, Россия на пороге нового времени, М. 1972, стр. 137–139（ルリエ批判）.

37) したがって厳密に言えば，『書簡』が『物語』と一致するのはその前半部についてである。『書簡』前半部と『物語』にみられる主たる相違は，個々の点でのそれを別にすれば，『書簡』には冒頭部分と中ほどに，著者が自分自身について語っている箇所があるのにたいし，『物語』ではそれが削られていることである。後述訳註をも参照。

38) Жданов, Указ. соч. стр. 85–90.

39) たとえばГудзий, Указ. соч. стр. 252–254.

40) Schaeder, op. cit. ss. 91–100. シェーダーによれば，『書簡』は『物語』に先行するが，後者の直接の原本ではない。すなわち，両者間には何らかの作品が介在しているという。

41) Дмитриева, Указ. соч. стр. 58–66, 70–72, 90–91, 94–101.

たって，両作品を比較検討し，両者およびその関連作品のテクストを，最古のそしてもっとも完全な写本によって公刊している。彼女は『書簡』前半部と『物語』（どちらもロシア諸公に関する二伝説を伝えている）とを比較考察した結果，両者のテクストにみえる差異は，『物語』の作者が『書簡』を修正ないし改訂した際に生じたと考えるべきであることをつきとめ，『書簡』の方が早く書かれたことを主張する。彼女によれば，『書簡』の執筆年は1506～23年おそらくはヴァルラーム府主教時代（1511～21年），いずれにせよヴァシーリー三世期（1505～1533年）のことであるが，その前半部をもとにして『物語』が編まれた経緯は以下の如くであった。公式筋（ヴァシアン・パトリケーエフか）からの依頼でスピリドン・サヴァが執筆した『書簡』は当のモスクワ国家当局を完全に満足させるものではなかった。何よりもそれは私信の形式をとっていたし，叙述も明晰さと簡潔さに欠けているように思われた。そこで「モスクワ公式筋」московские официальные круги はこれを改作することにした。その結果，『書簡』前半部から『物語』が，後半部から『リトワ諸公の系譜』が生まれることとなった。『物語』の成立年代ははっきりしないが，『書簡』執筆後のヴァシーリー三世期，遅くともイヴァン四世の戴冠式（1547年）以前と考えられている。後述の如く，『物語』はイヴァンのこの戴冠式のための«чин венчания» 本文において利用されているのみならず，その序文にもなっているからである。『リトワ諸公の系譜』についても，正確な成立年代は示しえないが，ヴァシーリー三世とエレナ・グリンスカヤの婚姻（1526年1月）後のヴァシーリー存命期と推定されている。改訂の具体的内容について言えば，『物語』における改訂は比較的軽い程度にすんだのにたいし，『リトワ諸公の系譜』においては，『書簡』（後半部）はかなりの程度手をいれられた。明らかにモスクワ当局は，『書簡』後半部については大きな不満をいだいたようである。問題は以下の点にあった。すなわち，『書簡』後半部ではリトワ諸公の系譜が記され，それにたいしロシア諸公の家柄の良さが強調されているのだが，ロシア諸公といっても，ここではトヴェーリ諸公のことが意図されていたのである。これはモスクワにとっては，もちろんきわめて不都合であった。そこで『リトワ諸公の系譜』ではトヴェーリ諸公に関する記述は大巾に削られ，かわってモスクワの諸公が登場することとなった（以下訳註参照）。

以上がドミトリエヴァの見解であるが，これにたいしまず反論したのは A. A. ジミーンであった。彼はドミトリエヴァ上掲書への書評のなかで，彼女が『書簡』をオリジナルとする点，および『物語』の成立をヴァシーリー三世期のものとする点を批判し，二伝説を伝える最古のテクストは，「チュドフスカヤ写本」（1540年代初頭の）のうちに含まれており，それは元来は1498年のドミトリー・イヴァノヴィチの戴冠式との関連で著わされたとする。ジミーンの言うこの『チュドフスカヤ物語』は二伝説を伝える一連の作品群の原型となり，『書簡』も『物語』の二つの版（後述）もそれぞれ直接にこの原型からつくり出されたという[42]。

42) А. А. Зимин, Рецензия на книгу Р. П. Дмитриевой, Исторический Архив, 3, 1956, стр. 235–238: Его же, Античные мотивы в русской публицистике конца XV в., в кн.: Феодальная Россия во всемирно-историческом процессе, Сб. статей, посвященный Л. В. Черепнину, М. 1972, стр. 128–138. ジミーンの見解は，その後ドイツの研究者フィリップの支持をうけている（Philipp. op. cit. S. 98–99)。

これにたいし，ルリエは，やはりドミトリエヴァ上掲書への書評のなかで彼女の説を支持する。その際彼はとくに『書簡』における親トヴェーリ的傾向と『物語』における親モスクワ的傾向を指摘し，これはトヴェーリ出身のスピリドン・サヴァが，まだトヴェーリがロシアの覇権を求め続けていた時期（15世紀中葉）の，トヴェーリの何らかの作品を史料に『書簡』を執筆し（16世紀初頭），それをのちにモスクワ当局者が改作して『物語』にしたと考えるべきで，その逆ではないとする。すなわち，モスクワの覇権が確立していた16世紀初頭に，もともとモスクワ的であった『物語』を親トヴェーリ的色彩を強くのこす『書簡』に改作したと考えるのは不自然であるというのである[43]。

他方，最近 A. Л. ゴリドベルクはドミトリエヴァの見解をより包括的に問題とする論文で独自の見解を表明している。それによれば，アウグストゥスおよびモノマフの帝冠をめぐる二伝説を伝える最初の説話が著わされたのは1510年代から20年代初頭にかけてのことである。とくにモスクワ・チュートン騎士団間の対ポーランド条約が結ばれた頃(1517年）が，リューリックを「プルスの地」と結びつける思想の出現期と考えられる。この時期はまた，モスクワが活発化しつつある諸外国との外交交渉において，自国の権威づけに積極的にならざるをえなくされており，二伝説はそのための恰好の論拠となりえた。このようにして，16世紀10～20年代初頭に，二伝説を中核とする説話のオリジナル版（ゴリドベルクはこれを説話の「第一版」とよぶ）が成立するが，この今は失われてしまった「第一版」の著者は，「モスクワ外交官」の一人，おそらくはかつてノヴゴロド大主教ゲンナージーの下で聖書の翻訳に従事したドミトリー・ゲラシモフであった。既述の如く，ドミトリエヴァは二伝説の創作者をスピリドン・サヴァと考えたのであったが，ゴリドベルクはスピリドンの『書簡』が「多くの点で」もっとも初期のテクストを伝えてくれることは認めつつも，必ずしもすべての点においてではないことを指摘する。すなわち，『書簡』は現存する一連の関連作品のなかで，オリジナルにもっとも近いが，オリジナルそのものではないというのである。ゴリドベルクは続いて，説話の「第一版」，ないしそれにもっとも近い『書簡』の初期の改訂版として，二つの独立の作品（それぞれ「第二版」，「第三版」とよばれている。ジミーンの言う『チュドフスカヤ物語』はこの「第三版」であるという）[44]をあげたあと，説話の「第四版」として，『物語』をもってくる。彼によると，この「第四版」はイヴァン四世の1547年の戴冠式との関連で編まれたもので，今日伝わる『物語』は，16世紀後半のある『系譜書』の序文に予定されたものであるという。『物語』はそれゆえ，比較的後期の改訂版であり，これを，二伝説を伝える一連の関連作品の代表的名称として用いるドミトリエヴァらは誤っているという[45]。

以上のように，ゴリドベルクは，『書簡』がオリジナルそのものではなくとも，それに近いものであることを認め，また一連の関連作品の出発点としての位置を占めることをも承認しながら，その後の諸版の相互関係については，ドミトリエヴァらと対立する。とくに『物語』の位置づけは彼においてはきわめて低い。

---

43) Я. С. Лурье, Рецензия на книгу Р. П. Дмитриевой, Известия АН СССР, Отделение Литературы и Языка, т. XV. вып. 2, 1956, стр. 171-177.

44) 註46をみよ。

45) А. Л. Гольдберг, К истории рассказа стр. 207-215.

ゴリドベルクの批判をうけたドミトリエヴァはすぐさま自説の擁護を試みている。彼女は二伝説を伝える初期の作品群として，ゴリドベルクもとくに注目した『書簡』と『物語』を含む四つの作品[46]をとくにとりあげ，この四つの作品群の相互関係を新たに考察する。彼女の考察は詳細をきわめているのでくわしく紹介することはできないが，結論としておよそ次の点を主張ないし確認している。1）二伝説の創作者はスピリドン・サヴァで，彼の『書簡』は他の一連の作品の源泉となった（ジミーン，ゴリドベルク説の反駁），2）『物語』は『書簡』を直接改作してできたもので，両者の間に他の二つ作品群が介在するとするゴリドベルクの説は誤り，3）この二つの作品群（ゴリドベルクの言う「第二版」と「第三版」）の成立史は複雑で簡単に定めえないが，両者とも『物語』成立後のものであること，等である[47]。

さて以上に『物語』と『書簡』の関係についての諸家の見解をややくわしく紹介してきたが，これは第一に，以下に訳出を試みるに際してのテクストをいずれに求めるべきかが，この問題の解決方法と関連するからであり，第二に，この問題を検討することによって『物語』をはじめとする同種の諸作品の成立をめぐる事情が明らかになると考えたからである。筆者はこのいまだ最終的結論が得られていない問題において，大枠においてドミトリエヴァの説に従いたいと考えている。それは彼女の一連の研究の説くところ[48]が現在もっとも妥当と判断されるからであり，また『書簡』が現存中の作品群のなかでは，もっとも初期のものである――オリジナルそのものかどうかは別にしても――ことには，ルリエはもとよりゴリドベルクも賛成しているからである。もっとも本稿では，『書簡』ではなく『物語』を考察の主たる対象とし，また訳出の際のテクストにしたいと考えている。その理由は，これもドミトリエヴァとともに，『物語』を『書簡』の「モスクワ公式筋」による改作と考えるからである。モスクワ国家当局は，プスコフの僧フィロフェイの「モスクワ第三ローマ」理念において頂点に達する教会側の教権主義的イデオロギーをさけて，より世俗的な理念を『書簡』のうちに認めたが，それをさらに政治的・現実的目的にかなうように改作したのであった。現にこのような改作の結果である『物語』は，次節でみるように，様々な形でモスクワ当局によって利用されている。『書簡』の現存写本（3本）が少ないのにたいし，『物語』のそれが比較的多い（32本）ことも，後者の公的性格を裏づけているようにみえる。かくしてモスクワ国家の公式的政治理念を対象とする場合には，『物語』こそより適切な素材となるであろう。

4

ヴァシーリー三世期の16世紀初頭に「モスクワ公式筋」の介入で編まれたという『物

46）『物語』と『書簡』以外に『アルハンゲリスキー写本による系譜』と『皇帝アウグスト物語』（ジミーンのいう『チュドフスカヤ物語』）である。既述の如く，ゴリドベルクは『書簡』を説話全体の「第一版」に近いものとし，『物語』を「第四版」としたが，彼はさらに『アルハンゲリスキー写本による系譜』を「第二版」，『皇帝アウグスト物語』を「第三版」としたのであった。

47）Р. П. Дмитриева, О текстологической зависимости, между разными видами рассказа о потомках Августа и о дарах Мономаха, ТОДРЛ, т. XXX(1976) стр. 217-230.

48）さらに次の論文をも参照のこと。Р. П. Дмитриева, О некоторых источниках《Послания》Спиридона-Саввы, ТОДРЛ,XIII (1957), стр. 440-445; Её же, К истории создания《Сказания о князьях владимирских》, ТОДРЛ, XVII (1961), стр. 342-347.

語』は，その成立後まもなく，種々の形でモスクワ国家当局によって利用されることとなった。

もっとも，当のヴァシーリー三世の政府が『物語』を公式の場で利用した事例は知られていない。このへんはドミトリエヴァらの説の弱点でもあるが，ただ，すでに紹介したヘルベルシュタインの記述が彼のモスクワ滞在中の見聞に基づいてのものだとすると，ヴァシーリー三世治世にも，二伝説は少なくとも流布していたことにはなる。

『物語』が公式的理念として用いられた最初の例は，まだ17歳のイヴァン四世の戴冠式との関連においてであった[49]。1547年1月16日に挙行された戴冠式をめぐってはいまだ解決をみないいくつもの問題があるが[50]，この戴冠式がツァーリ権力の強化を目的としたものであることについては疑いない。イヴァン四世ないしその側近は，このときロシア史上はじめて「ツァーリ」としての戴冠式を挙行しようと決意したのであったが，そのためには当然，ロシアの君主は「ツァーリ」であることを内外に論証する必要にせまられた。そのために『物語』が恰好の手段と考えられたことは既述のとおりである。かくして『物語』の後半部（モノマフ帝冠伝説）は1547年『戴冠式規定』の序文として用いられることになった。この序文は『ロシア大公叙任書』«Поставление великих князей русских» という表題を付されて，あたかも別個の作品となっているかの如くであるが，中身は『物語』後半部そのままである[51]。つまりそこでは，ウラジーミル・モノマフによる帝冠の獲得と，「ツァーリ」としての戴冠の事情が『物語』と同じ形式で記されているのである。同じ内容はまた，箇所によっては同じ文章で，『戴冠式規定』本文そのものにおいてもくりかえされている。

イヴァン四世政府は，戴冠式後もツァーリの称号を承認しようとしない諸外国——とくに後述するようにポーランド・リトワ連合王国は頑強に拒否した——に，自己の称号の追認を求めていくことになるが，最初にそれに応じたのは，モスクワ君主の称号問題には直接の利害関係をもたないイギリスを除けば[52]，コンスタンチノープル総主教庁であった。後者は1557年頃から始められたモスクワ側からの承認要請をうけいれ，1561年モスクワに正式の承認文書を送付した[53]。この文書は上記の『叙任書』と同じ形式の「モノマフ帝冠伝説」を採用している。もっともウラジーミル・モノマフによる帝冠の獲得は，ウラジーミル側の戦勝のゆえとはされておらず，コンスタンチノス・モノマコス帝の好意で帝冠

49) Дмитриева, Сказание, стр. 110-118.

50) これについてはさしあたって D. B. Miller, The Coronation of Ivan IV of Moscow, JbfGO, N. F. Bd. 15 (1967), SS. 559-574. を参照のこと。

51) Дмитриева, Сказание, стр. 182-184. にテクストが含まれている。『戴冠式規定』そのものについては P. Nitsche, Grossfürst und Thronfolger, Die Nachfolgepolitik der Moskauer Herrscher bis zum Ende des Rjurikidenhauses, Köln/Wien 1972, S. 261 f. の叙述がすぐれている。『規定』は Е. В. Барсов によって ЧОИДР. 1883, кн. 1 стр. 42-66, 67-90. に公刊されている。ちなみに，ドミトリー・イヴァノヴィチの1498年『戴冠式規定』（前述）も同書 стр. 32-38. に公刊されている。

52) 1553年 Richard Chancellor の白海岸到来によってイギリスとロシア間に直接交渉が開かれたが，その後間もなくメアリ女王とフィリップ（フェリペ二世）は，イヴァン三世を Imperator とよんでいる。См. В. Савва, Московские цари и Византийские василевсы, Харьков 1901 = Slavic Printings and Reprintings, 127, Mouton 1967, стр. 340-341.

53) Дмитриева, Сказание. стр. 119-123.

がロシア側に渡されたと修正されている。ビザンツ側の威厳を保とうとする姿勢の現われであろうか。なおこのとき総主教側はモスクワ君主にツァーリの称号を認める条件として，総主教側のイニシァティブでの戴冠式のやり直しを求めたが，これはイヴァン四世によって拒絶された。物質的援助をモスクワに求めていた総主教側は弱い立場に立たされていたのである。

さて以上にはもっぱら『物語』の後半部，すなわち「モノマフ帝冠伝説」の「公式筋」による利用について記したが，『物語』前半部の「アウグストゥス後裔伝説」も同様に利用された，それはまず，1555年に編まれた『君主の系譜書』«Государев родословец»においてである。これはモスクワの「官位庁」Разрядный приказ で編纂されたモスクワ国家最初の「公式的」系譜書であるが，モスクワ大公家の詳しい系譜をはじめ，モスクワに仕える旧分領諸公，貴族らの系譜——その他アストラハン，クリミア，カザンの諸汗，さらにはリトワ大公などの諸門の系譜をも合わせ，全部で43章からなるので，『43章版系譜書』ともよばれる——を収録している[54]。これは，いわゆる門地制などとの関連で複雑化しつつある国家勤務の遂行を円滑に行なうためという実際的な使命をもって編纂されたと考えられるが，同時にモスクワ大公家の高貴さを誇示するという目的もあった。「アウグストゥス後裔伝説」がそのためにきわめて好都合であったことはいうまでもない。15世紀までの年代記では，リューリックは「ヴァリャーグ」出身ないしは「ドイツからやってきた」とされていたのが，このときはじめて，公式の『系譜書』においてアウグストゥスにまで遡及されたわけである[55]。このようにして国家的な承認をうけた『アウグストゥス後裔伝説』は，ロシア大公家の系譜書がラテン語に翻訳されたとき（1576年），ラテン語版にも入りこんだという[56]。

二伝説は以上のようにもっぱら『物語』から国家文書のなかにとりいれられるようになったのであるが，これは他にも様々な方式で利用されている。それは16世紀中葉の公式的年代記（ヴォスクレセンスカヤおよびニコノフスカヤ年代記，そしてイヴァン四世治世にささげられた挿絵入り年代記『ツァーリの書』Царственная книга)[57]において，またイヴァン四世時代の二大国家的文学記念物，——『大聖者伝』«Четьи минеи» と『階梯書』«Степенная книга»[58]において[59]，さらにはイヴァン四世自身の書簡[60]や既述の遺言状などにおいても利用されている。また，イヴァン四世の戴冠式後まもなく，クレムリン内のウスペンスキー寺院内部に創られた「ツァーリの座」царское место の小扉には，ウラジ

54) これについては M. E. Бычкова, Родословные книги XVI-XVII вв. M. 1975, стр. 32-64. を参照のこと。
55) Дмитриева, Сказание, стр. 126-128
56) Там же. стр. 129.
57) これらの年代記については，さしあたり，Тихомиров, Указ. соч. стр. 254-259. を参照。
58) この二大記念物については，さしあたり，Гудзий, Указ. соч. стр. 321-325. を参照。
59) 以上詳しくは，Дмитриева, Сказание, стр. 129-135.
60) イヴァン四世はたとえば，ポーランド王ジクムント・アウグストへの書簡（1556年，1567年），スウェーデン王ヨアン三世への書簡（1573年），ポルベンスキー公への書簡（1577年）などで自らが，ローマ皇帝アウグストゥスの後裔であることを誇示している。Послания Ивана Грозного, подготовка текста Д. С. Лихачева и Я. С. Лурье, под ред. В. П. Адриановой-Перетц, М.-Л. 1951, стр. 158, 200-202, 260, 629-30, 645.

ーミル・モノマフによる帝冠獲得の説話のテクストが刻みこまれた(1551年)が，このテクストは既述の『戴冠式規定』への序文(『叙任書』)からとられたものであるという[61]。

『物語』の伝える二伝説は以上の如く，政府の側からの広範な活用をみたが，それはさらに外交交渉の場においても積極的に援用された。

イヴァン四世当時のロシアは対外政策上困難な立場におかれていた。それはポーランド・リトワ国家と，国境地帯をめぐってすでに長期間争っていたし，クリミアおよびカザン・ハン国とも慢性的な交戦状態にあった。北方でもやがてリヴォニア戦争が始まらんとしていた。このような状況のなかでモスクワは諸国家と活発な外交交渉を行なわざるをえなくされたが，その際交渉当事者をとくに悩ましたのは，モスクワ君主の称号問題であった。モスクワはすでにイヴァン三世期から諸外国にたいし称号問題を提起していたが，「ツァーリ」の称号の承認を公然と要求したのは，1547年以後のイヴァン四世であった。称号問題は，言うまでもなく，モスクワ国家の国際的地位と威信に関わるものであったが，それのみではなかった。この問題は以下に示すごとくすぐれて現実的な意味をもつものであった[62]。

モスクワ側からのツァーリの称号の承認要求にたいし，それをもっとも早くうけいれたのは，既述のごとくイギリスとコンスタンチノープル総主教庁であったが，他の諸国は容易にそれを認めようとはしなかった。なかでもローマ教皇庁とポーランド・リトワ国家はモスクワのもっとも手強い交渉相手であった。モスクワのカトリック化を承認の条件としていたローマはともかく[63]，ポーランド・リトワがこのような態度をとったのは，まさしくモスクワとの間に現実的な問題をかかえていたからであった。それは言うまでもなく前述の国境・領土問題である。もしモスクワ君主がモスクワという一地方の君主ではなく，「全ルーシ」のツァーリであり，遠くキエフ国家の諸君主の後裔であるということになれば，旧キエフ国家領であった現在の東部リトワにたいするモスクワの要求は正当なものになるであろう。このような帰結をもたらす称号は，ポーランド・リトワからすれば容易に承認しがたいものであった。ここでは問題は，モスクワ君主がツァーリであるか否か，であるよりも，「全ルーシ」の支配者であるか否か，にあるのであるが，それにもかかわらず，イヴァンのツァーリ称号の使用のうちに，ポーランド・リトワ側はこのような隠された意図をみてとっていたのであった。

モスクワ側はツァーリの称号を用いることの正当性を論拠づけるためにいくつかの理念を案出したが，それはとくにこのポーランド・リトワを念頭においてのことであった。そしてこのような理念のなかでも，かの二伝説はもっとも重要なものであった。ここで両者間の複雑な交渉経過の詳細にふれる余裕はないが，その大筋のみを記しておこう[65]。

---

61) Дмитриева, Сказание, стр. 118.

62) 以下については，とくに，Дьяконов, Указ. соч. стр. 149-164; Савва, Указ. соч. стр. 285-400. による。また拙稿「モスクワ第三ローマ理念考」をも参照されたい。

63) ローマがロシア君主をツァーリと認めたのは，ピョートル一世期になってからのことである。См. Савва, Указ. соч. стр. 400.

64) V. Glötzner によるとイヴァン四世は，自己のツァーリ称号の正当性の論拠を全部で八つ提起したという。V. Glötzner, Das Moskauer Cartum und die Byzantinische Kaiseridee, Saeculum, Bd. 21, 1970, S. 410. これについては拙稿「モスクワ第三ローマ理念考」を参照。

65) Савва, Указ. соч. стр. 287-323, 341-345, 357-366, 367-373, 378-380, 384-386.

モスクワは1547年のイヴァン四世の戴冠式の二年後にはすでに承認要求を開始している。称号問題は，その後1581年にローマ教皇庁の仲介で両国間に10年間の休戦条約が締結されるまで，ほとんど途切れることなく続く両国使節間の交渉の場で提起され続けたのであった。それにもかかわらずイヴァン四世はその悲願を結局は実現させることができなかった。その後のモスクワ諸ツァーリもこの問題にたいしてはイヴァン四世と同様の態度をとり続けた。すなわちイヴァンの後継者フョードル・イヴァノヴィチ，その後を襲ったボリス・ゴドノフ，また偽ドミトリー一世，そしてヴァシーリー・シュイスキーも同様にツァーリと名のり，その承認をポーランド・リトワに求め続けた。だがポーランド・リトワもまたその拒否的態度をかえることはなかった。後者がモスクワ側の要求をのむのは，モスクワにロマノフ新王朝初代ツァーリとして，ミハイル・フョードロヴィチが登場してからのことである。1634年，ポーランド王ウワジスワフ四世は，15年前の休戦条約（デウリノ条約）で獲得したスモレンスクなどの旧リトワ領の確保を条件にモスクワの「ツァーリの座」へ野望を放棄したが（ポリャノフカ条約），このときミハイルははじめてポーランド側からツァーリの地位とその称号を承認されたのであった。

かくして称号問題は，ローマの場合を除いて一応終結をみたのであったが，われわれには16世紀初頭にモスクワの文人によって練りあげられたかの「政治的虚構」は，この問題においてもっともよくその価値を発揮したように思われる。ともあれ，『物語』は以上のように広く利用されることによって，モスクワ国家の公式的文献としての地位を獲得しえた。ほぼ同じ時期に執筆されたフィロフェイの書簡が，16世紀には比較的狭い範囲でしか利用されなかったことと対照的である。

『ウラジーミル諸公物語』試訳

この和訳のテクストは Дмитриева, Сказание, стр. 171–178, «Сказание о князьях влдимирских. первая редакция» である。

『物語』は二つの系統（редакция）で伝わっている。両者ともに，ノアが三人の息子へ世界を分割する話に始まり，ウラジーミル・モノマフ治世で終る同一テーマを伝えている。だが両者間には二つの顕著な相違がある。①終り方の相違。一方はその最末尾で，キエフにおけるウラジーミル・モノマフの死が語られ，その歿年，享年，埋葬場所が記されているのにたいし，他方はそのかわりに，ローマ教会の正教からの離教の記事で終る。②前者のテクストには中ほどに以下の小見出しがあり，そのあとにウラジーミル・モノマフについての記事が続く。「ロシア大公叙任書。聖なる肩衣とツァーリの冠で大公位に叙任する（慣習）はどこからもたらされ，またいかにして始められたか」（括孤内引用者），後者にはこれがない。ドミトリエヴァ（前掲書，15–37，44–57ページ）は後者をより基本的な版（第一系統）と考えている。第一系統は14写本，第二系統は12写本で伝わるという。本和訳のテクスト（第一系統）はそのうち国立レーニン図書館蔵，ヴォロコラムスキー修道院文書，No. 572からのものである。

『物語』はすでに，Жданов, Русский былевой эпос, стр. 588–603. に刊行されている。だが彼は，ドミトリエヴァの言う第二系統のある写本をもとに，いくつかの写本を「恣意

的」に組みあわせて，そのテクストをつくりあげている。H. K. Гудзий 編の Хрестоматия по древней русской литературе XI-XVII веков, изд. 6-ое, M. 1955, стр. 226–227. は主としてこれに依拠している。

なお本和訳には『リトワ諸公の系譜』の和訳も付される。本文で述べたごとく，これは『物語』と本質的に一体をなす作品と考えられるからである。テクストは Дмитриева, Сказание, стр. 179–181. である。

翻訳に際しては，J. A. V. Haney の英訳 (Haney, Moscow-Second Constantinople, pp. 359–367)，および K. Müller の独訳 (O Bojan, du Nachtigall der alten Zeit. Sieben Jahrhunderte altrussischer Literatur, hrsg, von H. Graßhoff, K. Müller und G. Sturm, Frankfurt/Main, 1965, SS. 230–236) を参照した。前者はドミトリエヴァの上掲書テクストにより，後者はジュダーノフのテクストによるものである。ドミトリエヴァのテクストの部分訳は G. Vernadsky (senior editor), A Source Book for Russian History from Early Times to 1917, vol. 1. Yale Univ. Press, 1972, p. 159 にも含まれている。

和訳に際し，テクストの異読は訳註のなかでふれる若干の場合を除き，とくに考慮することはしなかった。原文においては，聖書ないし歴史上の人物の名前は，通例用いられるのと異なる表記がなされることが多く，また同一人物についても異なる表記がなされる場合もある。訳出に際しては若干の場合（たとえばノア，ローマなど）を除き，なるべく原文に即して表記し，とくに必要と認められる場合以外は訳註で指摘することも控えた。訳文中の括孤内は訳者が補ったものである。なお訳註のために用いた文献はとくに記すことを断念した。

大いなるルーシのウラジーミル[1]
諸大公の物語

カナンの地およびアルファクサドの名でよばれる地の物語から。このアルファクサドは，大洪水の後に生まれたノアの最初の子である[2]。父ノアの祝福により，全世界は三つに分割され，彼の三人の子シム，ハムそしてアフェトに与えられた。ハムは怠惰のゆえに父ノアの祝福から除かれた。というのは，酒を飲んで寝こんだ裸の父ノアに覆いをかけなかったからである。ノアは酔いからさめて，一番下の息子が彼にしたことを知るや，次のよう

1) 写本によっては，「ウラジーミル，モスクワそしてすべての」とある。モスクワ諸公は，公式的には「ウラジーミル大公」と名のった。これはキエフ大公国が解体した後，ルーシの政治的中心となったウラジーミル・スーズダリ大公国の支配権を表現する称号であった。ウラジーミル・モノマフが建設したというウラジーミルの町（クリャズマ河畔の）を首都としたのはアンドレイ・ボゴリューブスキー公（1157–74 年在位）である。ウラジーミルが実際にロシアの政治的中心であったのは 13 世紀初頭までの短期間にすぎないが，その後のルーシ諸公は，この「ウラジーミル大公位」を求めて相争った。『物語』成立の頃のモスクワ大公の正式の称号にもこの名残りはみられ，そこではまず「全ルーシの」という言葉が来て，その後に諸公国の名称が続いたが，その最初に来るのが「ウラジーミルの」であり，「モスクワの」はその次でしかなかった。モスクワ諸公の「ウラジーミル大公位」への執着は次の点にも表われている。すなわち，モスクワ諸大公は，大公位に登るとき，伝統的にウラジーミルの町のウスペンスキー寺院において戴冠されたが，この伝統はヴァシーリー二世の戴冠式のとき（1432 年）まで続いていたことが確認されるのである。

2) 聖書（創世記 10:22）ではアルファクサド（アルパクサデ）はシム（セム）の子とされている。

に言った。「ハムには呪いがあるように，彼は二人の兄たちの奴隷となるように。」[3] そして彼は二人の息子シムとアフェトを祝福した。彼らは後むきになりながら裸の父に覆いをかけ，裸の姿をみなかったからである。また彼はシムの子アルファクサド[4] を祝福して，彼がカナンの諸地方に住むようにと言った。そしてアルファクサドに双子が生まれた。兄をメルセムといい，弟をフスといった[5]。彼らはエジプト人の始祖である。やがて彼らから同族が増え，何世代にもわたった。フスはインドの奥深き国々へと去り，その東方の地に拡がった。他方メルス[6] の種族も増えて，この国に境を接するほどになった。またアフェトについては[7]，その種族は北の国々からあふれ出て，闇の国々にまで達した。この一族のなかからファリス[8] という名の族長がカラブリアの国々に現われ，おのれの名にちなんでアルファクスという名の町を建てた[9]。その曾孫は名をガイドゥヴァリイといったが，彼はシムの地のアッシリアではじめて占星術の書を著わした[10]。彼の後にくるのがセオストル[11]である。このセオストルはエジプトの地で誰よりも先に王位についた。そして彼の治世の後，多くの年月がすぎ去った。そして彼の一族からフィリクス[12] が君臨しはじめた。彼は全世界を支配した。フィリクスの後，幾多の年月がたち，エジプトに同じ一族から魔法使いの，名をナクタナフ[13]という王が現われた。この王はフィリップの妻アリンピ

3) 創世記 9:25 では呪われたのはハムの息子カナンである。

4) 上記では「ノアの子」とされていたアルファクサドが，ここでは「シムの子」と修正されている。スピリドン・サヴァの『書簡』には二人のアルファクサドが出てくるが（一人は「ノアの第四子」（大洪水後に生れた，ノアの最初の子）で，他は「シムの子」である），ノアから祝福されてハムの財産（カナンの地）を得たとされているのは「ノアの第四子」アルファクサドである。それにたいし『物語』の作者は，聖書の記事に忠実たらんとして，このアルファクサドを「シムの子」と修正した（彼自身，先には，『書簡』同様，『ノアの子』アルファクサドに言及していたにもかかわらずである）。だがこの修正のために，『書簡』ではそれなりに首尾一貫していた話が，『物語』では混乱してくる。たとえば，「物語」では後出のガイドゥヴァリイはアフェトの子孫ファリスの曾孫とされながら，その人類最初の占星術書を「シムの地」で著わしたことになっている。『書簡』ではガイドゥヴァリイは「シムの子」アルファクサドの曾孫であり，それゆえ「シムの地」で書いたとされていた。また『物語』では，「シムの子」アルファクサドの二人の子（メルセムとフス）が「エジプトの始祖」とされながら，後には「エジプトの地で誰よりも先に王位についた」のはアフェトの子孫セオストルとされているが，『書簡』ではメルセムとフスは「ノアの子」アルファクサドの子であり，セオストルはメルセムの子孫とされていて，「エジプトの始祖」と「エジプト最初の王」の家系はつながっている。

5) 聖書（創世記 10:6）ではメルセム（ミツライム）とフス（クシ）はハムの子とされている。ミツライムはヘブル語ではエジプト人を表わす語である。

6) メルセムのこと。

7) 以下『物語』はこのアフェトの一門に主たる注意がむけられる。(『書簡』では「ノアの第四子」アルファクサドの一門が中心的存在であった。)

8) アフェト（ヤペテ）の孫タルシシ（創世記 10:4）のこと。

9) 『物語』の混乱の一つ。『書簡』では次のようになっている **И вста некый началник из рода того имянем Фарсис в Калаврийских странах и създа град в има свое. [Имяше же и Сим, сын ноев, сын имянем] Арфаксад.** （また，この一族のなかからファルシスという名の族長がカラブリアの国々に現われ，おのれの名にちなんだ町を建てた。〔ノアの子シムもまた〕アルファクサド〔という子をもっていた。〕）『物語』の作者はおそらく〔　〕の部分を写しそこなった。その結果ファルシス（ファリス）の名にちなんだ町の名がアルファクス（アルファクサド），というナンセンスになったと考えられる。

10) 前註 4 参照。

11) ヘロドトス『歴史』II: 102-104, 106-110. の言うセソストリスか。

12) フィリクス　不明。

13) ナクタナフ二世（在位358～341 B. C.）か。

ヤーダとの間にマケドニアのアレクサンドルを生んだ[14]。彼は世界を支配した二人目の人物であったが，その支配は12年間続いた。彼は32年間しか生きず世を去ったが，（そのとき）エジプトを家臣のプトレメイに与えた[15]。一方アレクサンドルの母は息子の死後，父のエチオピア王フォル[16]のもとに帰った。フォルは彼女をネクトナフ（ナクタナフ）の親族ビズのもとへ送り再婚させた。このビズは彼女との間に娘をもうけ，アンチヤと名づけた。そしてソスヴェニに町を建て，町の名を自分と娘の名からビザンチヤとよんだ[17]。今日われわれがツァーリグラードとよんでいる町である。マケドニアのアレクサンドルから癩病やみのプトレメイ[18]まで22代のプトレメイ家の王が続いた。

癩病やみのプトレメイはクレオパトラという大変賢い娘をもっていた。彼女は父プトレメイのもとでエジプト王国を統治した。その頃ローマ皇帝ユーリエ[19]は，ローマの軍師であった女婿アントニン[20]を軍勢とともにエジプトへ派遣した。アントニンがエジプトと戦うために，陸路と水路で多くの戦士とともに到来するや，クレオパトラはローマの将軍アントニンに使者を，多くの贈り物をもたせて遣わし，次のように言わせた。「おお将軍よ，汝はエジプトの富を知らないでしょうか。わたしは，愚かにも人々の血を流すよりは，平穏のうちに支配することを望みます。」アントニンは憐みの情をいだき，エジプトを，流血にいたらしめずに手にいれ，いとも賢い女王クレオパトラは彼の妻となった。かくしてアントニンがエジプトの王となった。ローマ皇帝ユーリエはアントニンの思い上がりを聞き知るや，おのが弟アウグスト[21]を将軍として執政官らの上に任命し，彼を四人の兄弟[22]とローマの全軍とともにアントニンを討つべく派遣した。アウグストは到着するやエジプトを征服し，おのが女婿アントニンを討ち，自らエジプトに君臨した。彼は癩病やみのプトレメイの娘，女王クレオパトラをとらえ，エジプトの多くの財宝とともに船でローマへ送った。だが彼女は，「わたしは囚われの身となってローマに連れて行かれるよりは，エジプトの女王として死を受けることを選ぶ」と言って，毒蛇により自らの生命を断った。

ユーリエに反対して執政官らが立ちあがった。ヴルトス，ポムプリーそしてクラスであ

---

14) アレクサンドロス大王は，マケドニア王フィリッポス二世とエピルス王女オリュンピアの子である。アレクサンドロス大王を魔法使い（祭司王）ナクタナフ（ネクタネブ）の子とするのは，有名な偽カリステネスの『アレクサンドリア』である。これは紀元2～3世紀の作品と考えられるが，スラヴ世界には11～12世紀に古ブルガリア語訳で紹介された。ロシアでもこのブルガリア語訳が早くから知られていたと思われるが，13世紀には，『ギリシア・ローマ年代記』や『ユダヤ年代記』のなかでその変種が知られ，15世紀にはセルビア語版も入り，後者はとくに普及した。『物語』（および『書簡』）の作者はこの作品を知っていたのであろう。

15) プトレマイオス一世（367～283 B. C.），アレクサンドロス大王の将軍。

16) 不明。

17) オリュンピアは上記のとおり，エピルス王の娘である。彼女がビザンチウムの伝説上の建設者ビザスと結婚したことはない。

18) プトレマイオス13世（51～48 B. C.）。

19) ユーリウス・カエサル（100～44 B. C.），実際には「皇帝」ではなかった。

20) マルクス・アントニウス（83頃～30 B. C.）母方の関係でカエサルとつながっていたが女婿（зять）ではなかった。

21) オクタヴィアヌス（63 B. C.～14 A. D.），ローマ帝国初代皇帝（30 B. C.～14 A. D.）。カエサルの兄弟ではなかったが，カエサルの妹ユリアの娘アッティアを母としていた。のちカエサルの遺志でその嗣子となった。

22) 後出のパトリキィ，アウグスタリィ，アリリク，ピオンか。

る[23]。彼らはユーリエをローマで殺害した。そして間もなくユーリエ殺害の知らせはエジプトのアウグストのもとに届いた。彼は兄の死を大いに嘆き，すぐにすべての軍司令官，官職長，諸役人，行政官らをよび集め，彼らにローマ皇帝ユーリエの死を知らせた。すると彼らは，ローマ人もエジプト人も，声をあわせて言った。「おお，いとも誉高き将軍よ，われらは汝の兄弟，皇帝ユーリエを死からよびもどすことはできない。だからわれらは偉大なる汝をローマ帝国の帝冠で戴冠させよう。」そして彼らは彼に，エジプト最初の王セオストルの衣装，緋袍と薄亜麻の服を着せ，デルミリドの帯[24]をしめさせた。また頭には，マケドニアのアレクサンドルがインドから持ち帰ったインド王ポーリ[25]の頭巾を戴かせ，両肩には世界の支配者フィリクス王のマントをかけ，そして歓喜の叫び声を高らかにあげて言った。「喜べ，アウグスト，ローマと全世界の皇帝よ」と。

5457年[26]，ローマ皇帝アウグストはその執政官らとともにエジプトにむかったが，当時エジプトの支配はプトレメイ一族のうちにあった。そのとき彼をイロド・アンチパトロフ[27]が出むかえ，多くの戦士と食糧と贈り物を提供した。かくて神はエジプトとクレオパトラをアウグストの手に委ねた。アウグストは全世界に貢税を課しはじめた[28]。彼は兄弟パトリキイをエジプト王に任じた。またもう一人の兄弟アウグスタリイをアレクサンドリアの支配者に任じた。イロド・アンチパトロフ・アスコロニチャーニンは（アウグストへの）尊崇の念大いなるものがあったので，（アウグストは彼を）ユダヤ人の王としてイエルサレムに任じた。アジアは自分の親族エウラゲルドに委ねた。またおのが兄弟アリリクは上イストラ[29]に，ピオンは黄金の地，すなわち今日ウグル地方[30]とよばれている地に任じた。また親族のプルス[31]をヴィスラ[32]河畔の，マルボロクの町，トゥルン，フヴォイニそして名高きグダネスク[33]とその他ネモン（ニェメン）とよばれる川——それは海に注いでいる——沿いの多くの町々に任じた。そしてプルスは齢を重ね，四世代にわたって生きた。それ以来今日まで（この地方は）プルスの地とよばれている。

23）ブルートゥス，ポンペイウス，クラッススのことであるが，カエサルの暗殺時（44 B. C.）ポンペイウス，クラッススはすでに故人であった。暗殺はブルートゥスとカツシウスを首謀者として行なわれた。

24）不明。

25）アレクサンドロス大王侵入の時（326 B. C.）のパンジャブ地方にあった三王国の一つポールス（パウラヴァ）のこと。

26）ロシアにおける世界開闢紀元。キリスト紀元前51年のこと。

27）ヘロデス・アンティパス，ユダヤ王（4 B. C.～37 A. D.）。

28）以下の「アウグストによる世界分割」の記事に出てくるアウグストの「兄弟」や「親族」らはすべて虚構である。詳しくは本文の註(17)にあげた Schaeder と Ivanka の研究を参照のこと。

29）イストリア。

30）ハンガリー。

31）この名前の由来は明らかでない。すでに『原初年代記』はその冒頭部分で「プルシ」に言及しているが，これはヴァリャギ海（バルト海）沿岸に住む民族名としてである。ジュダーノフはアウグストゥスの継子 Drusus——兵を率いてエルベ河にまで達したという——を Prus の語源と考えている。他方シェーダーは，これは1517/18年と1519年にチュートン騎士団長アルブレヒト・フォン・ブランデンブルクの使者としてモスクワを訪れたディトリッヒ・フォン・シェーンベルクの創作と考えている。つまり（東）プロイセンから「プルス」がひき出されたのであって，『物語』にある如く，「プルス」からプルスの地＝プロイセンが造られたのではない，という。

32）ヴィスワ川。

33）いずれも今日のポーランド国内の都市，マルボルク，トルニ，ホイニッツェ，グダインスク。

その頃ノヴゴロドのある軍司令官で名をゴストムィスル[34]という者が，その生涯を終えようとしていたが，ノヴゴロドのすべての有力者をよび集めて言った。「ノヴゴロドの人々よ，わたしは汝らに助言を与えよう。プルスの地に賢者たちを遣わし，かの地の種族からおのが支配者をよぶがよい。」そこで人々はプルスの地へ行って，その地にリューリックという名の公を見出した。ローマ皇帝アウグストと同族のものである。全ノヴゴロドから遣わされた使者たちはリューリック公に，彼らのもとに来て統治するようにと懇願した。リューリック公は二人の兄弟をひきつれてノヴゴロドにやって来た。兄弟の一人はトルヴォル，二人目はシネウスといった[35]。またもう一人の同族の者をつれて来たが，その名はオレーグ[36]であった。この時以来（町は）大ノヴゴロドとよばれるようになった。そしてリューリック大公が最初の公としてそこを統治しはじめた。

このリューリック大公から四代目がヴォロジーメル大公[37]である。彼は6496年にルーシの地を聖なる洗礼により照らした。またウラジーミル大公から四代目は，彼の曾孫，ウラジーミル・フセヴォロディチ・マナマフ[38]である。彼はキエフで大公位についたとき，諸公，貴族，高官らとともに相談をおこない，次のように言った。「余は，余に先立って支配し，大いなるルーシの旗と王笏とをもっていた者たちより劣っているであろうか。たとえば，大公オレーグはツァーリグラードに遠征し，全戦士のために莫大な貢税を獲得し，無事帰国した[39]。その後大公フセスラフ・イーゴレヴィチ[40]がコンスタンチンの都に遠征し，もっとも多額の貢税を獲ちとった。われらも神の憐みにより，われらの祖先とわが父，大公フセヴォロド・ヤロスラヴィチ[41]の血をひき，神から同じ栄光を受け継いでいる。そこで余は今，汝ら余の宮廷の諸公，貴族，軍司令官そしてキリストを愛する全戦士から助言をたまわりたい。神の御旨とわれらの決意とにより，生命（いのち）の源なる聖三位一体の名を，汝らの勇気の力で高くかかげようではないか。汝らはこれにたいしいかなる助言を余に与えるか。」諸公，貴族，軍司令官らは大公ウラジーミル・フセヴォロディチに答えた。「ツァーリの心は神の御手の中にあり。そしてわれらはすべて汝の御心にあり。」かくて大公ウラジーミルは，熟練し思慮に富める軍司令官らを集め，個々の部隊の隊長を任じた。すなわち，千人長，百人長，五十人長を諸階級の戦士たちの上にたてた。こうして彼は何千もの軍勢を集め，彼らをツァーリグラードのトラキア地方にむかわせた。軍勢はこの地方を大いに征服し，多くの財宝を得て戻ってきた[42]。

34）ノヴゴロド・スロヴェネ族の半伝説的指導者。ノヴゴロド最初の公ないしポサードニクとして「ヴァリャーギ」を招致したと言われる。

35）『原初年代記』862（6370年）の項を参照。

36）リューリック死後その遺子イーゴリを助けた公。912年ないし922年歿。

37）ウラジーミル聖公（キエフ大公980頃-1015年），988年（6496年）頃ロシアにキリスト教を導入した。

38）ウラジーミル・フセヴォロドヴィチ・モノマフ（生年1053年，キエフ大公1113-1125年）。

39）オレーグのコンスタンチノープル遠征は907年のことである。

40）スヴャトスラフ・イーゴレヴィチ（944頃-972年）のことか。971年頃，ブルガール人を討った後さらにビザンツへと進軍した。

41）キエフ大公（1078-1093年）。

42）ウラジーミル・フセヴォロドヴィチ大公がコンスタンチノープルへ遠征したことは知られていない。15・16世紀ロシアには「ウラジーミル公」のギリシア人との戦いについての民謡が広く歌われていたが（これはブイリーナのいわゆる「ウラジーミルもの」と当然つながりをもっていた），その源

当時ツァーリグラードを治めていたのは，敬神のツァーリ，コンスタンチン・マナマフ[43]であったが，丁度そのとき彼はペルシア人またラテン人と戦争中であった。そこで彼は賢者や治者らの会議を召集し，使節を大公ウラジーミル・フセヴォロディチに派遣した。それはエフェソ府主教ネオフィト，ミリチネ[44]とミチリネ[45]の二人の主教，アンチオキアの軍師アンチプ，イエルサレムの修道院長エウスタフィイその他の貴人らであった。皇帝は頸から生命(いのち)を与える十字架をとりはずした。これは主なるキリストが磔にされた生命を与える木そのものからつくられたものである。彼はさらに頭から帝冠をとり，それを黄金の盆の上に置いた。彼はまた，ローマ皇帝アウグストが愛で楽しんだ紅玉髄の箱と，おのが肩につけていた肩あて，およびアラブの黄金から造られた鎖その他多くの贈りものとを持ってくるように命じた。そしてこれらを府主教ネオフィト，主教たち，そして貴人らおのが使節らに委ね，彼らを大公ウラジーミル・フセ（ヴォ）ロディチのもとに遣わし，彼に懇願しつつ次のように言わせた。「おお神を愛する敬虔なる公よ，われらよりこの誉高き贈り物をうけとられよ。これらはそもそも永遠の昔から，汝の同族同門の，支配者の標章であり，誰にも服従することなき汝の専制帝国の誉と栄のため，また戴冠式のためのものである。この贈り物のゆえにわれらの使節は汝に次のことを懇願するであろう。すなわちわれらは貴き汝より平和と愛とを願っている。神の教会が混乱におちいることのないように，そして全正教世界がわが帝国の支配と，大いなるルーシの，誰にも服従することなき汝の専制支配のもとで平和のうちにあることができるように，また汝がこの帝冠で聖なる府主教キール・ネオフィトと主教らの手で戴冠され，爾後神により加冠されたツァーリとよばれるようにと願うのである。」かくてこの時から大公ウラジーミル・フセヴォロディチは偉大なるルーシのツァーリ，マナマフとよばれるようになった。その後彼は残りの期間をコンスタンチン帝と和解と愛のうちにすごした。爾来，今日まで，ウラジーミルの大公はロシア大公位にたてられるとき，この帝冠によって戴冠されるのであるが，これはギリシアのコンスタンチン・マナマフ帝が送ってきたものである[46]。

泉はウラジーミル聖公のケルソン遠征に関する説話であったと考えられる。ただ13世紀前半の有名な作品『ルーシの地の滅亡の物語』において，「ツァーリグラードのマヌエル帝は，ウラジーミル大帝におのが都をうばわれんことをおそれ，大いなる貢を彼におくりたり」と歌われていることからすると，モノマフがコンスタンチノープルへ遠征しなかったとは断定できない。なおマヌエル帝は1143-1180年のビザンツ皇帝。

43) コンスタンチノス六世モノマコス（1042-1055年）。

44) ミレトスのこと，小アジアにある（大）主教都市。

45) ミュティレネのこと，レスボス島にある（大）主教都市。

46) 以上に述べられた，いわゆる「モノマフ帝冠伝説」についての補足的説明。とくにコンスタンチノス・モノマコス皇帝とウラジーミル・フセヴォロドヴィチ・モノマフの関係について。先に註38と43で示した如く前者が歿したとき（1055年），後者はまだ2歳であった。従って「伝説」全体がすでに非歴史的なものである。この明らかな矛盾を，後代の年代記などは，コンスタンチノス・モノマコスの代りにアレクシオス一世コムネノス（1081-1118年）を登場させることによって解消しようとしている。なおウラジーミル・フセヴォロドヴィチはその「モノマフ」という渾名を，母親の家系（彼の母親は，彼の著作『モノマフの庭訓』によれば，モノマコス一門であった。なお『原初年代記』には6561＝1053年の項に，「フセヴォロドに息子が生まれ，しかして，彼の名をヴォロジメルと呼んだ。グレキ（ギリシァ人）の皇妃を母として」とあるのみである。多くの研究者はこの皇妃をコンスタンチノス・モノマコスの娘と推測している）から得ていた。したがって『物語』が，ウラジーミルはコンスタンチノス皇帝より，その帝権の標章を得たとき以来，モノマフとよば

さてコンスタンチン・マナマフの治世に，ローマ教皇フォルモス[47]はツァーリグラードの教会から除かれ，正しい信仰から離れて，ラテン信仰へとおちこんだ。皇帝コンスタンチンと至聖なる総主教キール・イラリエ[48]は，アレクサンドリア，アンチオキア，イエルサレムの至聖なる総主教らを帝都の会議へよび集めるよう命じた。敬神なる皇帝コンスタンチンは総主教らの助言を得て，聖なる世界教会会議の四人の総主教，府主教，主教そして司祭らとともに，教皇の名を教会の祈禱書から削り，彼を四人の総主教(と同等の地位)から除外した。かくて彼らは正教信仰から離れ，それ以来今日までさまよい歩いており，ラテン人とよばれるようになった。だがわれら正教キリスト教徒は，永遠の父と唯一人の子と，分つことのできない，生命を与える聖霊の聖三位一体を告白し，一つの神を信じ，たたえ，崇拝するのである。

リトワ諸大公の系譜

6830年[1]。神を知らぬバツの征服[2]の後，名をヴィチャネツ[3]というスモレンスク公家出身の公が，その捕われの境遇より逃がれ，ジョモチ[4]のある蜂蜜採取人のもとに住みついた。彼はこの蜂蜜採取人の娘を妻にめとり，彼女と30年暮らしたが子供に恵まれなかった。そして彼は雷に打たれて死んでしまった。ヴィチェネツ公亡きあと，彼の奴隷であったギギメニク[5]という名の馬丁が彼の妻を得た。こうして七人の子が生まれた。1ナロミンチク，2エウヌチク，3オルゲルジク，4ケストゥチク，5スクリガイリク，6コリヤジク，7マントニクである[6]。

れるようになった，とするのは誤りである。

『物語』にはまた，「爾来，今日にいたるまで，ウラジーミル諸大公は……この帝冠によっ戴冠される」とあるが，これは本稿の筆者が本文ですでにふれた如く，事実に反する。「モノマフの冠」が実際に用いられたのは，早くて1498年のことであった。『物語』の若干の写本はこの点の不合理を正すため，話を次のように変形させている。すなわちウラジーミルはその臨終に際して，帝冠をはじめとする標章を六男のユーリーに委ね，それを自己の霊魂の如く守り，代々伝えるべきこと，だが，神が遣わす，ふさわしきツァーリが到来するまでは用いてはならないことを命じた，という。この神の遣わすツァーリが，当該写本執筆当時のモスクワ君主（イヴァン四世）であることは言うまでもない。

47) フォルモスス・ローマ教皇(891-896年在位)。ここではコンスタンチノス・モノマコス帝期の東西両教会の分裂（1054年）がテーマとなっているので，フォルモススは関係ない。関連する教皇はレオ六世である。

48) キュリロス・ヒラリオン？1054年分裂当時のコンスタンチノープル総主教はミカエル一世ケルラリオス（1043-58年）である。

1) 1322年。

2) バツのロシア遠征は1236年-1240年（キエフ陥落）のことである。

3) ヴィテン（ヴィテニス），リトワ大公（1293-1315年），ゲジミン（ゲディミナス）の兄弟（ゲジミンの父とする研究者もいる）。『系譜』ではさらにヴィチェネツともよばれている。

4) リトワ人の故地ジェマイチヤ（下リトワ）。

5) ゲジミン（『系譜』ではゲジマン），リトワ大公（1316-1341年），ギギメニクは『系譜』ではさらにゲギメニクともよばれている。

6) 一般にゲジミンの子は出生順に1モンヴィト（『系譜』のマントニク），2ナリムント（ナロミンチク），3エウヌト（エウヌチク），4オリゲルド（オルゲルジク），5ケイストゥト（ケストゥチク），6コリアト（コリヤジク），7リウボルトとされている。スキルガイロ（スクリガイリク）はゲジミンの子にはいない。

6825年[7]。モスクワのユーリー・ダニーロヴィチ公[8]とトヴェーリのミハイル・ヤロスラヴィチ公[9]とがヴォロジーメル大公位をめぐる争いのためオルダ[10]へ出かけた。そしてトヴェーリのミハイル・ヤロスラヴィチ公がオルダで殺された。ユーリー・ダニーロヴィチ公は大公位を得てオルダより帰国した。彼は多くの町が荒れはて，人々が少ししか集まっていないのを見て，悲嘆にくれた。というのもチェルニゴフのミハイル公の死後[11]，イスマイルの子ら[12]がルーシ全土を，あたかも鳥が飛びまわるように駆けめぐったからである。彼らはキリスト教徒の同胞(はらから)を，ある者は剣で刺し殺し，他の者は捕虜として連れさり，死と破滅をもたらす飢えとを残していった。これはわれらの罪のゆえにわれらに起こったのである。

さて大公（ユーリー）は町や地方に（家臣）を遣わし，残っている人々を集め始めた。その際彼はかのゲギメニクをヴォロスク[13]とキエフの地に，またメンスク[14]のこちら側へと派遣し，奪い去られていた町や村を取りもどし，反乱をおこした者たちからツァーリへの貢税をとるように命じた。また彼とともにボレイコという名の，ある名高き男[15]と他の多くの者らをも派遣した。このゲギメニクとよばれる男は大変勇敢で，思慮も深く，人々から貢税を徴収し，財宝を奪ったので，大いに富んだ。また彼は多くの人々をおのれのまわりに集め，彼らに必要な物を惜しみなく与え，多くの地方を支配しはじめた。彼はこれらの人々からリトワ初代大公ゲジマンとよばれたが，これはルーシの君主である大公たちのあいだに平和がなく，互いに争っていたからである。

6859年[16]。大公セミオン・セミオノヴィチ[17]がヴォロジーメルとモスクワの大公位についた。この年リトワ初代大公ゲジマンが死去した[18]。彼の死後リトワ大公位には長子ナ

7）1317年。

8）ユーリー・ダニーロヴィチ，モスクワ公（1325年歿）。以下ユーリー公が主役となっているが，『書簡』後半部では，トヴェーリのアレクサンドル・ミハイロヴィチ公（1326–1339年）が中心人物となっている。

9）ミハイル・ヤロスラヴィチ，トヴェーリ公（1285–1318年），1305–1317年ウラジーミル大公となる。1317年ウズベク汗は大公位をミハイルより没収し，モスクワのユーリー公に与えた。ミハイル公は，その後の戦争でタタール軍の支援をうけたユーリー公を破るが，1318年ウズベク汗の下に召喚され，死罪を申し渡された。実際に手を下したのはロマネツ公（明らかにユーリーの家臣）と年代記は伝えている。なお『系譜』はもちろん伝えていないが，ユーリー公はその後1325年，オルダでミハイル公の子ドミトリイによって逆に殺害されている。ミハイル公はその後，ロシア教会によって聖人の列に加えられている。

10）チュルク・モンゴル系諸民族の軍事・政治組織をいう。元来チュルク系の語で「スルタンや汗の宮殿ないし天幕」を意味した。

11）ミハイル・フセヴォロドヴィチ，チェルニゴフ公（1246年歿）。初期の対タタール闘争の英雄。1246年，チェルニゴフ公位の保全を求めてバツ汗の下に赴くも，タタールの信仰を拒絶したことのゆえをもって殺害された。のち列聖された。

12）イシマイルはアブラハムとハガルとの間に生れた子（創世記第16章参照）。砂漠の民の祖と言われる。ここではタタールをさしている。

13）ワラキアのこと。『書簡』ではゲギメニク（ゲジマン）はトヴェーリのアレクサンドル公によってニェメン（ネマン）川地方に派遣されている。

14）ミンスクのこと。

15）不明。

16）1351年。

17）セミョーン・イヴァノヴィチ・ゴールドゥイ（イヴァン一世カリタの子）のこと。モスクワ・ウラジーミル大公（1340–1353年）。

18）ゲシミンが歿したのは1341年である。

リマント[19]がついた。だが異種族[20]との戦いが起こり，彼はその手中に陥ちいった。当時大公イヴァン・ダニーロヴィチ[21]がオルダにおり，大公ナリマントをタタールから買いうけ，彼をリトワに帰してやった。彼は約束どおり，おのが領地に帰りつく前に洗礼をうけ，グレープという洗礼名でよばれることになった。そしてこのゆえに兄弟たちは彼に大公位を与えなかった。

大公位についたのは彼の弟オルゲルドであった。そして兄のナリマントは大ノヴゴロドに赴いた。またエウヌトは今日ヴィリナとよんでいるところに行って住んだ。スキリガイロは兄弟ケストゥチーとともにヴィルナから20ポプリシチェ[23]はなれたある湖畔に住んだ。だがスキリガイロはその兄弟ケストゥチーにたいし立ち上がり，彼を殺した。ケストゥチーの子ヴィトフト[24]はドイツ人のもとに逃げ，そこで多くの仲間を集め，そこから戻ってきて，叔父のスキリガイロとその二人の子を討った。彼はおのが父と叔父の領地に住み，この地をトロキ[25]と名づけ，伯父オルゲルドと友誼を結んだ。このオルゲルドは酒を嗜まず，並々ならぬ智恵者であり，多くの地と公国とをおのがものとし，大いなる権力を有していた。

6858年[26]。リトワ大公オルゲルドはモスクワのセミオン・イヴァノヴィチ大公に多くの贈り物とともに使者を遣わし，平和とおのが兄弟の生命を乞い求めた。セミオン大公はオルゲルドの願いをききとどけ，彼の弟コリヤド[27]と他の者らを彼のもとに釈放した。オルゲルドは再びセミオン・イヴァノヴィチ大公に使者を送り，彼の義妹，トヴェーリのアレクサンドル・ミハイロヴィチ大公[28]の娘を乞い求めた。そこでセミオン大公はおのが教父，全ルーシの府主教フェオグノスト[29]の祝福を得て，彼に義妹ユリアニヤ大公女を与えた[30]。オルゲルドは彼女との間に七人の息子を得た。1アンドレイ・ポルテスキー，2ヴォロジーメル・ベリスキー，3イヴァン・オストロシュキー，4ヤコフ，5レグベニ・ヴ

19) ナリムント（上記ではナロミンチク）は上述のとおりゲジミンの第二子。父の死後リトワ大公となった。だが，彼はタタールとの戦いに敗れ捕えられた。彼はモスクワのイヴァン一世カリタが身代金を支払ったことにより釈放されるが，リトワ大公位は弟のエウヌトによって奪われてしまった。

20) ここではタタールのこと。

21) イヴァン一世カリタ，モスクワ・ウラジーミル大公（1328-1340年）。

22) リトワ大公（1345-1377年）オリゲルド，リトアニア語ではアルギルダス。既述の如く，ナリムントの後を襲ったのはエウヌトであった。もっとも彼は1345年，オリゲルドとケイストゥト両者によって追放される。

23) 距離を示す単位，1ポプリシチェは2/3ヴェルスタ（約1000歩，1ヴェルスタは1,067キロメートル）ないし1.5ヴェルスタにあたる。さらに1ポプリシチェを1日行程とみなす場合もある。

24) リトワ大公（1392-1430年），リトアニア語ではヴィタウタス。

25) ヴィルナ西方の町。

26) 1350年。

27) コリヤドはオリゲルド大公の命でオルダに赴き，対モスクワ同盟を結ぼうとしたが，逆にモスクワの画策で捕えられ，モスクワ側にひき渡されていた。

28) 註8を参照。

29) 在位1328-1353年。

30) 以上にリトワ大公オリゲルドはあたかもモスクワ大公セミョン・イヴァノヴィチ公の好意でトヴェーリ公女を得たかの如く記されているが，『書簡』では，トヴェーリ大公ミハイル・アレクサンドロヴィチが直接，娘をオリゲルドに与えたとされている。

ォルインスキー，6ヴァシレイ・チェルトリシュキー，7オレルコ・キエフスキーである[31]。

その後しばらくしてオルゲルド大公は病気になり，息子らに遺言を与えはじめた。彼は息子ヤコフ[32]を他の子らよりも愛していたので，彼に大公位とヴィリナの町を与え，他の子らは各々分領地に任じた。一方敬虔なる大公妃ユリアニヤは夫オルゲルドが臨終のきわにあるのを見て，何とかして夫を救おうと願い，おのが息子たちと教父，ペチェールスキー修道院の二人[33]の掌院をよび集めた。そして彼女は神の助力を得て夫オルゲルドを善き助言をもって説きすすめ，彼を聖なる洗礼にふさわしい身にした。かくて彼は聖なる洗礼を受けてアレクサンドルとよばれた。その後彼は大いなる修道士の身分をうけ，聖なるスヒマ[34]すなわち大いなる天使の姿で身を飾り，かくてアレクサンドルの代りにアレクセイとよばれた。そして数日後息をひきとり，その遺体は彼自身が建立したヴィルナの聖神母教会に安置された。その後しばらくして彼の妻である敬虔なる公妃ユリアニヤが亡くなった。遺体は同じ教会に安置された。他方オルゲルドの子ヤコフはラテンの誘惑に陥いり，リトワ大公ヤガイロとなった。彼は神を知らぬママイ[35]の助言者で友であったが，このママイはドン川の彼方で敬虔なる大公ドミトリー・イヴァノヴィチが打ち破った人物である。他方ケストゥチーの子ヴィトフトはヤガイロと友誼を結んだ。その後ヤガイロはクラコフに連れて行かれ，クラコフでポーランド王として戴冠された[36]。彼はヴィルナにはおのが兄弟ヴィトフトを任じた。ヴィトフトはヴィルナでリトワ大公となり，多くの町を建て始めた。彼はキエフとチェルニゴフを攻めとり，ブリャネスクとスモレネスクを奪い，かくて国境地帯のすべての諸公がその領地ともども彼の支配下に入り，キエフによりフォミニスク[37]にいたる地方がヴィトフトのものとなった。以上がこれについて知られていることである。

---

31) オリゲルドと二度目の妻ウリヤナとの間に生れた子は，ヤコフ（ヤガイロ）とセミョーン・リングヴェニ(レグベニ)の二人だけである（そのうちリングヴェニはヴォルィニ公であったことはない)。上記のアンドレイとヴォロジーメルはオリゲルドの最初の妻との間の子，ヴァシレイとオレルコはオリゲルドの孫である。イヴァン・オストロシュキーはどの史料にもみられない。

32) リトワ大公（1377-1392年）ヤガイロ（ないしヨガイラ）のこと，ポーランド王としてはヴワディスワフ二世ヤギェウォ（1386-1434年)。

33) два（二人）の代りにдавыд（ダヴィド）と読む研究者もいる。その場合「ペチェールスキー修道院の掌院ダヴィド」となる。

34) 東方修道制における最高のそして最も厳しい修道形態。具体的には共住制的修道を脱して隠者として修道する。ロシアではペチェールスキー修道院のフェドーシー以来知られたという。

35) キプチャク汗国の事実上の支配者（1380年歿)。ドミトリー・ドンスコイによりクリコヴォの野で打ち破られた。戦後トフタムィシュにより追われた。

36) いわゆる「クレヴォの連合」(1385年）のこと。ヨガイラはこの年カトリックの信仰をうけいれ，翌年ポーランド女王ヤドヴィーガと結婚して，ポーランド王にむかえられた（1386年3月4日)。(註32を参照)

37) フォミンスコエ公国。

補註)『リトワ諸公の系譜』が16世紀ロシア＝モスクワ政治思想史においてもった意味について補足しておきたい。モスクワ文学史上，リトワ諸公の『系譜』はまず『書簡』と『物語』（本稿でいう『系譜』）においてとりあげられた。ついで16世紀30年代にはヴォスクレセンスカヤ年代記の増補部分に（モスクワ，モルダヴィア，リャザン等の大公家のそれと並んで）とりあげられ，40年代には，最初の『系譜書』Родословная книга の編纂とともに，リトワ諸公の『系譜』にも独

立の章が割りあてられた。これは16世紀を通じて何度も改訂された。

さてドミトリエヴァやB. T. パシュートによれば，リトワ諸公の『系譜』はモスクワ諸大公のウクライナと白ロシアへの権利主張を根拠づける「歴史・社会時評的パンフレット」であるが，最近，M. E. ブィチュコヴァがこれに異論を唱えた。彼女は，『チュドフスカヤ物語』（彼女はジミーンに従って，これを15世紀末の作品と考えている。本稿32ページ参照）や『書簡』および『物語』におけるリトワ諸公の出自の扱いと40年代以降の『系譜』におけるその扱いとの間には変化が生じていることを指摘する。前者ではリトワ諸公はスモレンスク公の「奴隷」とされているのにたいし，後者ではポロツク公の直系（1129年，ポロツク公ロスチスラフ・ログヴォロドヴィチ公の息子ダヴィルがリトワ初代の公になったという）とされている。いずれの場合も歴史的事実が問題となっているのではなく，モスクワ文人の願望ないし主張が問題となっているにすぎないが，ブィチュコヴァはこのリトワ諸公の出自に関するモスクワ文人の態度の変化を次のように解釈する。すなわち，40年代以降の『系譜』には，モスクワ国家に仕えていたリトワ出身の諸公，いわゆるゲジミノヴィチ（ゲジミンの子孫）の利害が表現されており，モスクワ側はこの時リトワ人諸公のロシア諸公家との同等性，および「スモレンスク，ポロツク，チェルニゴフの地」（つまりウクライナと白ロシア）にたいするモスクワ，リトワ両国家の同権性を承認した，という。

これにたいしБ. Н. フロリャはモスクワに仕えるゲジミノヴィチらの利害関係をより精確に理解する必要性のあることを主張して，ブィチュコヴァを批判している。彼によれば，モスクワにおける自己の立場の強化に努めたリトワ出身諸公は，40年代には，確かに，リトワ諸公の出自をポロツク公と結びつけ，それによって自己を「奴隷」の恥辱から解放したが，これはモスクワ国家内部における彼らの立場の強化を図ったのではあっても，国際的観点から，その故国リトワの地位を高めようとしたのではないという。国境地帯をめぐってリトワと激しく争っていたモスクワ当局が，たとえ一時的にせよ（ブィチュコヴァも認める如く，60年代に入ると，『系譜』におけるリトワ諸公の出自に関する記述は再び反リトワ的になって行く），そのようなことを容認するはずはないからである。結局，フロリャによればモスクワのゲジミノヴィチはリトワ出身者であっても，あくまでモスクワの利害の遂行者であったことになる。ドミトリエヴァ上掲書，86–88 97–101などのほかに，В. Т. Пашуто, Образование Литовского государства, М. 1959, стр. 73–77; М. Е. Бычкова, Отдельные моменты истории русских генеалогических источников XVI в., в: Польша и Русь, Сб. статей под ред. Б. А. Рыбакова, М. 1974, стр. 365–377; Б. Н. Флоря, Родословие литовских князей в русской политической мысли XVI в., в: Восточная Европа в древности и средневековье, Сб. статей, М. 1978, стр. 320–328.

〔追記〕 なお本稿の執筆に際し，中村喜和一橋大学教授には一方ならずお世話になった。記して感謝したい。

On "The Tale of the Princes of Vladimir"

Takeo KURYUZAWA

The aim of this article is to search for the basis of the official political ideology of the 16th century Muscovite state.

It has long been believed that it was the famous theory or idea of "Moscow the Third Rome" that had provided the Muscovite state with such an ideology. But this had some defects as a political theory, as the author of this article previously pointed out in another paper ("On the idea of 'Moscow the Third Rome'" [in Japanese] in: Y. KANEKO [ed.] Roshiya no Shiso to Bungaku [Russian Literature and Thought] Tokyo, 1977, pp. 9–61). In the first place, it was a theory of exclusively religious

nature. Secondly, it was too vague and abstract for a political theory. Thirdly, the originator of this theory (Pskovan monk Philotheus) did not intend, as generally asserted, to give the Muscovite ruler any political guidance, but to urge him to take any steps necessary against the spreading moral corruption in Moscow.

What then could be the basis of such an official ideology, if it were not the theory of "Moscow the Third Rome"? Here our attention is attracted by "The Tale of the Princes of Vladimir," with which the present article deals.

The *Tale*, written presumably by an unknown government authority in the beginning of the 16 th century (during the reign of Vasily the Third), includes the following two legends as its essential components. The first legend tells that the Muscovite rulers can trace their descent through Rjurik back to the Roman Emperor Augustus. The second one insists that the princely regalia, especially the so-called "crown of Monomachos," had been delivered to one of the Russian rulers by the Byzantine Emperor Konstantinos IX Monomachos (1042–1055). With the help of these two legends, the *Tale* argued for the nobility of birth of the Muscovite princely family and the legitimacy of their rule. The author of this article is of the opinion that the *Tale* could be more easily adopted by the state authority as its political guiding principle than the theory of "Moscow the Third Rome".

In this connection, it is necessary to take into consideration also "The Genealogy of the Lithuanian Princes," to which our *Tale* closely related (according to the Soviet scholar R. P. Dmitrieva, both these are originally one and the same work). This *Genealogy* has as its purpose to show how humble were the births of the Lithuanian Princes, compared to those of the Muscovite Princes. It reminds us of the difficult political problems which Moscow faced at that time: it had long been at war with the Polish-Lithuanian state because of boundary problems. Therefore, it seems that the *Tale* with its *Genealogy* was written in order to support the concrete plans of the Muscovite state; that is, to justify its territorial ambitions.

It was such Soviet scholars as D. S. Lichachev, Ja. S. Lur'e, A. L. Gol'dberg, A. A. Zimin and, par excellence, R. P. Dmitrieva who had noted for the first time the official nature of the *Tale*. The author of this article owes much to their studies. He does not, however, share their assertion that the *Tale* has nothing to do with Byzantine political thought. It is easy enough to point out the Byzantine elements in the *Tale*, as, for example, the legend of the crown of Monomachos.

To this article is added a Japanese translation of the *Tale* and the *Genealogy* by the present author.